



# 西台 I・II 遺跡

—都市計画道路（扇城下秋間線）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2022

群馬県安中市教育委員会

口絵



西台Ⅰ・Ⅱ遺跡 全景（南東より）



西台Ⅰ・Ⅱ遺跡 全景（西より）





## 序

安中地区は安中台地、秋間丘陵、九十九川や秋間川などの河川によって形成された沖積平野など地理的なバラエティーに富んだ地域です。こうした環境下で郊外としての宅地化が進む一方で、稲作、畑作などの農耕地帯としても重要な役割を担ってきました。

今回、安中市を南北に縦断する西毛広域幹線道路のアクセス道路として都市計画道路3・5・7 翼城下秋間線の工事が計画され、工事に先立つ平成31年度（令和元年）、道路予定地に対して西台遺跡の発掘調査を実施する運びとなりました。

発掘調査では弥生時代から古代にかけて営まれた集落の一端が明らかとなりました。西台I・II遺跡周辺ではこれまで大規模な発掘調査は行われておらず、遺跡の空白地帯でした。そのため本発掘調査の成果は、安中市域の歴史を、また一つ深めることに寄与するといえましょう。

発掘調査以後、令和3年に西台I・II遺跡は工事が完了し、通か過去の人々によって営まれた集落は、現代を生きる私たちの生活向上のためのライフラインに姿を変えました。こうした歴史の移り変わりを本報告書で感じていただくとともに、学術分野ならびに郷土愛を育む一助となることを切に願うばかりです。

最後に、厳しい気性条件の下で発掘調査に従事していただいた方々、調査にご協力いただいた各関係機関をはじめとする皆様には感謝申し上げる次第です。

令和4年3月

安中市教育委員会教育長  
竹内 徹





## 例　　言

- 1 本書は都市計画道路事業（都市計画道路3・5・7扇城下秋間線）に伴う西台I・II遺跡（遺跡略称D-33）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 西台I・II遺跡は安中市安中字西台地内に所在する。
- 3 平成31年度～令和2年度の発掘調査および遺物整理作業は安中市都市整備課の国庫補助事業として、安中市教育委員会へ委託され実施した。令和3年度の報告書作成・刊行は安中市都市整備課の市単独費用事業として、安中市教育委員会へ委託され実施した。
- 4 確認調査は、安中市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係の井上慎也、穂崇志が担当し、平成30年度（平成30年9月26日～28日）に実施した。発掘調査は市文化財保護課埋蔵文化財係の鳥居貴庸、関根史比古が担当し、平成31年度（令和元年8月27日～12月3日）に直営で実施した。
- 5 発掘調査従事者は次のとおりである。（敬称略）  
生駒朝男 今井保美 岩井英雄 岩坂康男 大沢早知子 鬼形栄子  
清水正 多胡榮夫 多胡茂子 多胡わぐり 萩原治枝 潟本久江 村椿健
- 6 整理作業は平成31年度（平成31年8月1日～令和2年3月31日）、令和2年度（令和2年4月1日～令和3年3月31日）に安中市教育委員会直営で実施し、一部、遺物実測・トレイスを有限会社毛野考古学研究所へ委託した。報告書作成は令和3年度（令和3年4月1日～令和4年3月31日）に安中市教育委員会直営で実施した。
- 7 整理作業全般の総括は鳥居が行った。作業分担は以下のとおりである。  
遺構図面整理 データ編集：鳥居、関根、大月圭子、町田千明  
遺物整理：鳥居、関根、中里徳子、廣上良枝  
遺物実測：観察表他：鳥居、中里、廣上、関根、有限会社毛野考古学研究所（委託分）  
写真撮影・整理：鳥居、中里、廣上、毛野考古学研究所（委託分）
- 8 本書の編集・執筆は鳥居が行った。石器については井上が担当した。
- 9 遺構写真の撮影は鳥居、関根が行った。遺跡の航空写真撮影は株式会社測研に委託した。
- 10 基準杭測量、グリッドの設定、調査区平面図作成は株式会社測研に委託した。
- 11 発掘調査および遺物整理の期間中、以下の方々にご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・五十音順）。  
淺間陽 今城未知 岩崎孝平 谷川遼 外山政子 日沖剛史 右島和夫
- 12 調査組織

平成31年度 安中市教育委員会事務局	令和2年度 安中市教育委員会事務局
教育長 竹内徹	教育長 竹内徹
教育部長 高橋信秀	教育部長 高橋信秀
文化財保護課長 斎藤勝彦	文化財保護課長 斎藤勝彦
埋蔵文化財係長 井上慎也	埋蔵文化財係長 井上慎也
主事補 鳥居貴庸	主事 鳥居貴庸
主事補 関根史比古	主事 関根史比古



令和3年度 安中市教育委員会事務局

教育長 竹内徹  
教育部長 高橋信秀  
文化財保護課長 齋藤勝彦  
埋蔵文化財係長 井上慎也  
主 事 烏居貴庸  
主 事 関根史比古

## 凡 例

- 1 遺構の実測図は1/80を基本としたが、住居内の土坑・ピットは1/40、溝などの遺構には1/60を併用している。
- 2 遺構図中の北は磁北を示す。なお、座標は日本測地系を使用した。
- 3 本文中に使用した地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「富岡」、安中市都市計画地図(1/25000)である。
- 4 遺物実測図の縮尺は次の通りである。弥生土器・土師器・須恵器：1/4(実測図脇の●は須恵器を示す)、石器・鉄製品・ミニチュア土器：1/2で掲載した。また、これらの縮尺以外で掲載した遺物については、その都度、スケールをあてている。
- 5 遺物写真図版の番号は遺物実測図番号と対応する。
- 6 遺物検出状況として遺構図とともに掲載されている遺物はすべて1/8である。
- 7 土層説明中での記号、略称は次の通りである。  
土層名称および量の基準：「新版標準色誌」による。  
色調「<」：明るさを示す（暗<明）  
しまり、粘性 ◎：あり ○：ややあり △：あまりなし ×：なし  
混入物の量 ◎：大量（30～50%） ○：多量（15～25%） △：少量（5～10%） ※：  
若干（1～3%）  
混入物 R P：ローム粒子（溶け込んだ状態） R B：ロームブロック（固まりの状態）  
Y P：板鼻黄色軽石
- 8 遺構名称  
Y：弥生住居 H：古墳・古代住居 D：土坑 M：溝 P：ピット
- 9 遺構平面図における網掛けは焼土の集中範囲を示す。破線は推定線を示す。
- 10 遺物図版中の土器・須恵器の網掛け（土器内面）は黒色処理を示す。須恵器の網掛けは灰軸範囲を示す。



## 本文目次

序	
例　　言	
凡　　例	
本文目次	
挿図目次	
表　　目　次	
写真図版目次	
I　調査の経緯	1
II　調査の方法と経過	1
III　遺跡の地理的・歴史的環境	5
IV　基本層序	10
V　遺構と遺物	
1　弥生時代	14
2　古墳時代	24
3　古代	54
4　その他の遺構・遺構外出土遺物	62
5　出土石器について	71
遺物観察表	78
VI　発掘の成果と総括	93



## 挿図目次

第1図 西台I・II遺跡位置図	2
第2図 グリット設定図	3
第3図 各調査区の遺構配置図	4
第4図 安中市地形図	6
第5図 西台遺跡周辺の遺跡分布	7
第6図 基本土層	10
第7図 Y-1号住居址	15
第8図 Y-2号住居址、Y-3号住居址(1)	16
第9図 Y-3号住居址、(2)	17
第10図 Y-4号住居址、Y-5号住居址	18
第11図 Y-1・2・3号住居址出土遺物	19
第12図 Y-3号住居址出土遺物	20
第13図 Y-3・4・5号住居址出土遺物	21
第14図 H-1号住居址、H-2号住居址	27
第15図 H-3号住居址、H-4号住居址	28
第16図 H-5号住居址(1)	29
第17図 H-5号住居址(2)、H-6号住居址	30
第18図 H-7号住居址	31
第19図 H-8号住居址	32
第20図 H-9号住居址	33
第21図 H-10号住居址	34
第22図 H-11号住居址	35
第23図 H-12号住居址	36
第24図 H-15号住居址	37
第25図 H-16号住居址	38
第26図 2号溝	39
第27図 1号堅穴式遺構	40
第28図 H-1・2・3号住居址出土遺物	41
第29図 H-4・5号住居址出土遺物	42
第30図 H-5・6・7号住居址出土遺物	43
第31図 H-8号住居址出土遺物	44
第32図 H-9・10号住居址出土遺物	45
第33図 H-10・11号住居址出土遺物	46
第34図 H-11・12号住居址出土遺物	47
第35図 H-12号住居址出土遺物	48
第36図 H-15号住居址出土遺物	49
第37図 H-15号住居址出土遺物	50
第38図 2号溝、1号堅穴式遺構出土遺物	51
第39図 H-13号住居址、H-14号住居址	55
第40図 1号溝	56
第41図 H-13号住居址出土遺物	57
第42図 H-14号住居址出土遺物	58
第43図 2号堅穴式遺構、遺構外検出ピット・土坑	63
第44図 D-1・4号土坑、第1・2・3・トレンチ出土遺物	64
第45図 第3・4トレンチ出土遺物	65
第46図 第4トレンチ出土遺物	66
第47図 第4トレンチ、Aグリット出土遺物	67
第48図 Aグリット出土遺物	68
第49図 A・Bグリット出土遺物	69
第50図 Bグリット出土遺物	70
第51図 出土石器1	72
第52図 出土石器2	73
第53図 出土石器3	74
第54図 西台I・II遺跡出土土器I～Ⅳ期	94
第55図 西台I・II遺跡出土土器Ⅴ～Ⅶ期	95
第56図 西台I・II遺跡出土土器Ⅷ期	96
第57図 西台I・II遺跡と周辺の古墳分布	98
第58図 秋間地区の主古墳石室	98
第59図 安中17号墳の出土遺物	99
第60図 安中17号墳の石室(西側から撮影)	100
第61図 安中17号墳ノミ状工具痕とL字加工	100
第62図 上野地域の横式石室の変遷	101
第63図 西台I・II遺跡と古墳の対応関係	102

## 表目次

第1表 遺跡分布	8
第2表 Y-1号住居址出土遺物	78
第3表 Y-2号住居址出土遺物	78
第4表 Y-3号住居址出土遺物(1)	78
第5表 Y-3号住居址出土遺物(2)	79
第6表 Y-4号住居址出土遺物	79
第7表 Y-5号住居址出土遺物	79
第8表 H-1号住居址出土遺物	80
第9表 H-2号住居址出土遺物	80
第10表 H-3号住居址出土遺物	80
第21表 H-12号住居址出土遺物	83
第22表 H-15号住居址出土遺物	84
第23表 2号溝出土遺物	84
第24表 1号堅穴式遺構出土遺物	85
第25表 H-13号住居址出土遺物	86
第26表 H-14号住居址出土遺物(1)	86
第27表 H-14号住居址出土遺物(2)	87
第28表 1号土坑出土遺物	88
第29表 4号土坑出土遺物	88
第30表 第1トレンチ出土遺物	88



第11表	H-4号住居出土遺物	80	第31表	第2トレンチ出土遺物	88
第12表	H-5号住居出土遺物(1)	80	第32表	第3トレンチ出土遺物	88
第13表	H-5号住居出土遺物(2)	81	第33表	第4トレンチ出土遺物	89
第14表	H-6号住居出土遺物	81	第34表	Aグリット出土遺物(1)	89
第15表	H-7号住居出土遺物(1)	81	第35表	Aグリット出土遺物(2)	90
第16表	H-7号住居出土遺物(2)	82	第36表	Aグリット出土遺物(3)	91
第17表	H-8号住居出土遺物	82	第37表	Bグリット出土遺物(1)	91
第18表	H-9号住居出土遺物	82	第38表	Bグリット出土遺物(2)	92
第19表	H-10号住居出土遺物	82	第39表	出土石器	92
第20表	H-11号住居出土遺物	83			

## 写真図版目次

図版1	H-6号住居 カマド(南から撮影)
	H-7号住居 全景(南から撮影)
	H-7号住居 カマド(南から撮影)
	H-8号住居 全景(西から撮影)
	H-8号住居 全景(南から撮影)
	H-8号住居カマド 土器検出(南から撮影)
	H-3号住居 全景(南から撮影)
	第5トレンチ1号溝(北から撮影)
図版2	第4トレンチ1号溝(南から撮影)
	第2トレンチ1号溝(西から撮影)
	Y-1号住居 全景(左上が北)
	Y-1号住居 土器検出(住居北東隅)
	Y-4、H-1・2・13号住居 全景(左上が北)
	Y-5、H-4・14号住居 全景(左上が北)
	H-10・15号住居 全景(左上が北)
	H-15号住居 カマド(南西から撮影)
図版3	H-9号住居 全景(右上が上)
	H-9号住居 焼土層検出(南壁中央)
	Y-3、H-5号住居 全景(上が北)
	Y-3号住居 枝、炭化物検出
	Y-3号住居 灰
	Y-3号住居 土器検出
	1号竪穴状遺構 全景
	1号竪穴状遺構 完掘状況(西から撮影)

図版4	H-15号住居カマド前 土器検出
	Y-2号住居、2号溝、2・3号土坑 全景(上が北)
	2号溝 全景(東から撮影)
	2号溝 セクション(東から撮影)
	H-11号住居 全景(上が北)
	H-11号住居 カマド(西から撮影)
	H-12号住居 全景(上が北)
	H-12号住居 カマド(西から撮影)
図版5	1号竪穴状遺構 完掘状況(東から撮影)
	H-16号住居 全景(右上が北)
	H-16号住居 カマド(南西から撮影)
	2号竪穴状遺構(上が北)
	第2トレンチ1号ビット 完掘状況
	2号土坑 完掘状況
	3号土坑 完掘状況
	4号土坑 完掘状況



## I 調査の経緯

調査に至る経緯平成27年3月11日、安中市都市整備課（以下、都市整備課）より都市計画街路事業（都市計画道路3・5・7扇城下秋間線）の市道新設工事に伴い、計画地における埋蔵文化財の取り扱いについて安中市教育委員会（市教委）へ照会があった。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地（安中市遺跡No205）に該当する。このことから平成27年3月16日、市教委から都市整備課へ、計画地に対して試掘確認調査を実施する必要がある旨を回答した。

平成30年8月29日、都市整備課より文化財保護法第94条通知および埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が市教委へ提出され、同年9月26日から28日の期間で試掘確認調査を実施した。試掘確認調査では、計画地全体から窓穴住居と考えられる落ち込みを複数箇所確認した。都市整備課との市教委との協議の結果、計画変更是不可能であるとの結論に至ったため、平成30年12月28日、発掘調査の指示を市教委から都市整備課へ行い、平成31年（令和元年）8月27日から12月9日まで本調査を実施して記録保存の措置を講じた。

## II 調査の方法と経過

発掘調査の方法 本調査は平成31年8月29日から平成31年12月9日の期間で実施した。調査対象区は東西約200m、幅約11mで、三つの調査区に分けられる。西端のA調査区は面積が狭小であったこともあり、トレンチ調査を基本として発掘調査を行った。調査区中央のB区と調査区東端のC区では、面調査を実施した。このうちA・B区は西台I遺跡、C区が西台II遺跡となる。

A区では、トレンチ調査を基本として第1から5トレンチまで設定して掘削をおこなった。各トレンチ、重機による表土掘削後、ジョレンを用いて人力による遺構検出作業をおこなった。遺構検出後の発掘では通例の発掘調査に準じて作業を進めた。遺構図面は1/20を基本として作図した。遺物・遺構完掘写真については、デジタル一眼およびフィルムカメラを併用して撮影をおこなった。

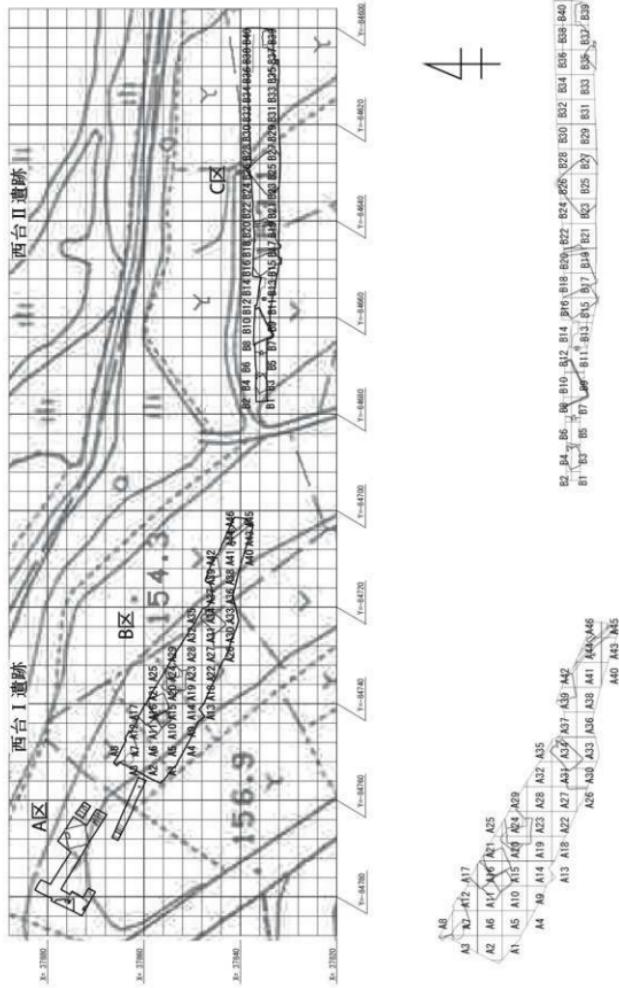
B・C区は、基本的にA区の手順と同様に進めた。一方でB・C区は面調査を基本として作業を進めたため、調査区全体に4m×4mのグリッドを設定し、調査区南西隅から順に番号を割り振った。なおB区に設定したグリッドはAグリッド、C区に設定したグリッドはBグリッドと呼称した。

発掘調査の経過 工事が西側（A区）から進められていく計画であったため、調査もA区から始めるごとに、徐々に東（C区方向）へ調査区を広げていった。トレンチ調査を基本としたA区では、平成30年に市教委によって実施された試掘確認調査時のトレンチに合わせて1トレンチ、2トレンチを設定した。3トレンチは1トレンチで確認された住居を広げる形で、1トレンチに直行させて設定した。4トレンチは3トレンチとつなげつつ、1トレンチおよび2トレンチに平行になるように設定した。1から4トレンチまでを掘削中に2トレンチ西端と4トレンチ東端で溝跡を確認した。そのため、5トレンチは溝の延長上に設定している。

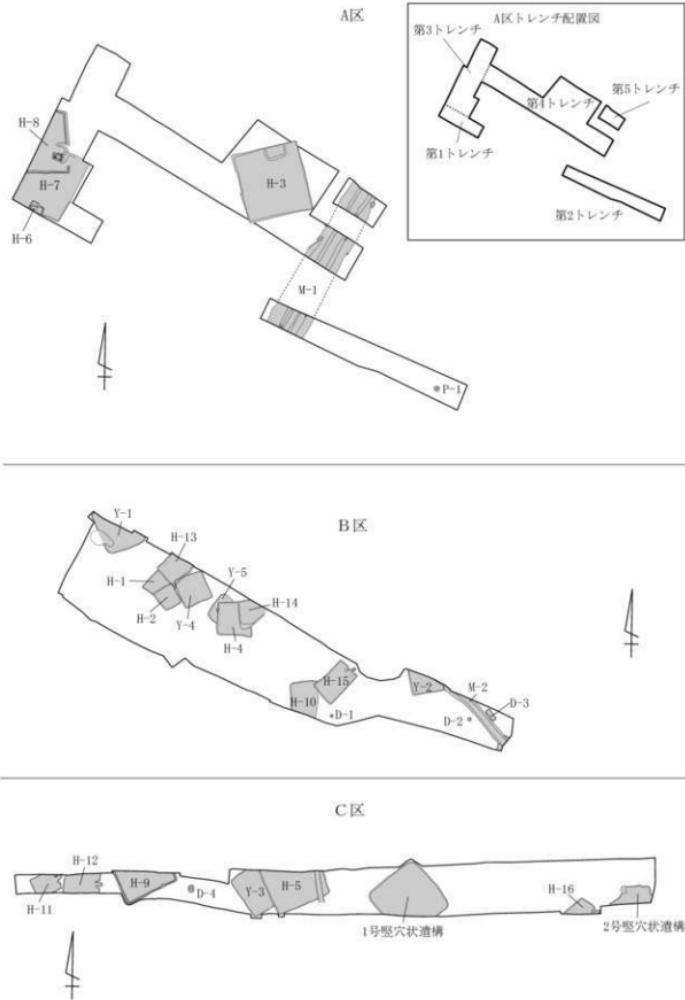
面調査を実施したB区、C区ではB区からC区にかけて調査を進めていった。C区は当初から調査区の北側半分が現代の造成によってすべて削りとられ、一段下がった地形であった。B区調査中、先だってこの部分に対し、東西トレンチを設定してバックホーで試掘を行った。その結果、



第1図 西台I・II遺跡位置図



第2図 グリット設定図（上段：S = 1/900 下段：S = 1/700）



第3図 各調査区の遺構配置図



表土直下がすでにV層であり、遺構・遺物も確認できなかったため調査対象からは外した。

資料整理の方法 出土遺物はすべて水洗いを行い、小破片を除いて注記した。接合・復元は可能な限り行った。接合にはセメダインCを、復元にはバイサムを使用したが、基本的に補強を目的としたため、最小限の復元にとどめている。

遺物実測は器種、器形等が判断できる程度に遺存したものを抽出して、等倍による図化および拓本を実施した。図化した遺物実測図はIllustratorCCを用いて、デジタルトレースを行った。一部の遺物の図化・トレース・写真撮影を有限会社毛野考古学研究所に委託をして行った。遺構図は株式会社測研に委託し、デジタルデータ化されたものを整理して使用した。写真は写真台帳を作成し整理・管理できるようにした。遺物写真はデジタル一眼レフD90を用いて撮影した。

資料整理の経過 資料整理は発掘調査と並行して進めた。令和2年度は図化する遺物の抽出作業、図化、デジタルトレースを基本的に行なった。令和3年度は、遺物写真的撮影、報告書刊行のため必要な図表の作成および編集作業を中心に行なった。

### III 遺跡の地理的・歴史的環境

#### 1 地理的環境

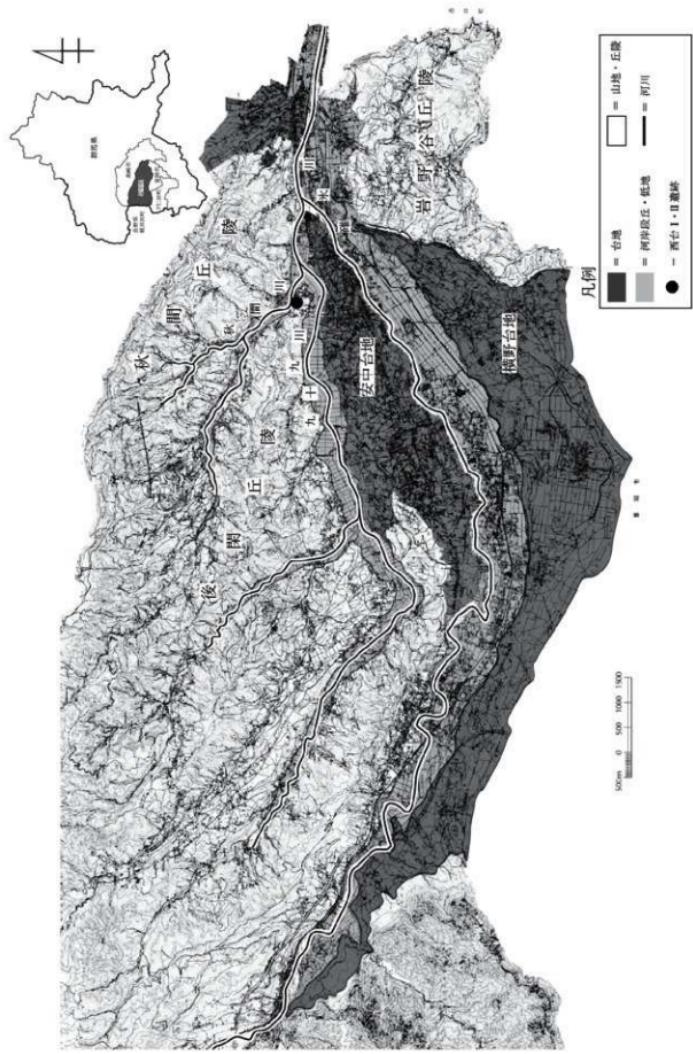
安中市は群馬県西部に位置しており、関東平野の周辺部にあたる。市域の西側は長野県軽井沢町と隣接し、北西部から南西部には1000mを超える山々がそびえる。これらの山から流れりいくつもの小河川が安中市中央部を東西に流れる碓冰川と九十九川を形成している。

西台Ⅰ・Ⅱ遺跡は安中市安中字西台に所在する。本遺跡は後閑丘陵東側の段丘上縁辺に位置しており、一段下の低地部では秋間川が北から南へ流下する。秋間川から段丘上までの比高差は約6～8mである。本遺跡の南側では、低地部を挟んで九十九川が西から東方向へ流れしており、本遺跡付近で秋間川と合流する。秋間川をはさんだ対岸には秋間丘陵が北西から南東方向へそびえる。また、九十九川を挟んだ対岸には安中市中央部を東西に延びる安中台地が確認できる。本遺跡は背後に後閑丘陵、眼前には九十九川と秋間川、秋間丘陵、安中台地が眺望できる地点であり、眼下には河川によって形成された低地も広がる地形的バラエティに富んだ環境であったことがわかる。

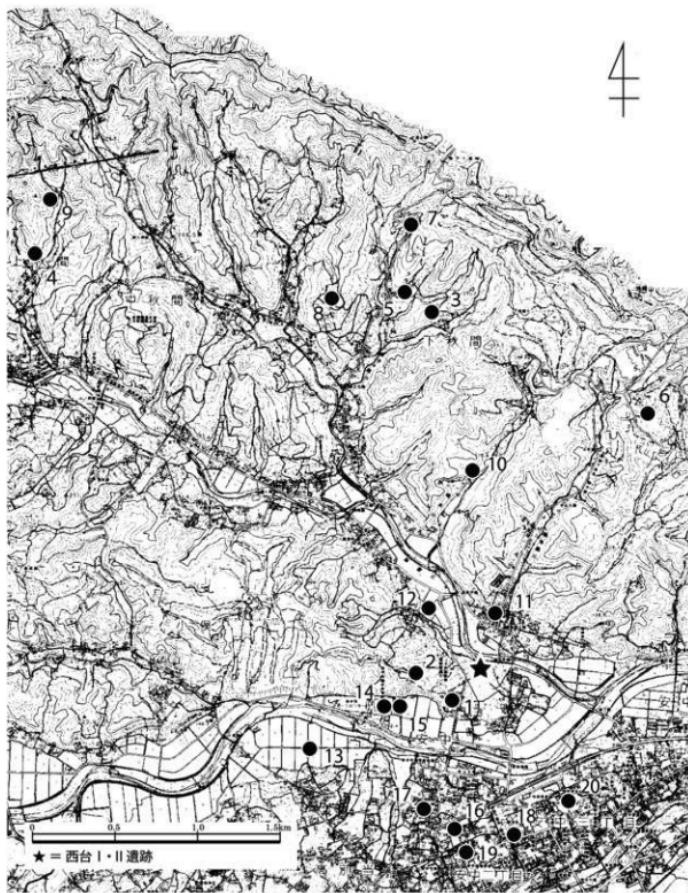
#### 2 歴史的環境

本遺跡周辺では、発掘調査数が少なく、少ない調査例でも古墳時代以降の遺跡が圧倒的多数を占める。そのため、古墳時代以前の当該地域の様相はあまりわかっていない。ここでは、発掘調査が行われた事例を中心に主に古墳時代以降の歴史的環境についてふれる。

本遺跡が立地する後閑丘陵の東側段丘上には、6世紀後半から7世紀代の築造と推定される小間古墳群が所在する。そのうち、安中17号墳（1）は平成23年に発掘調査が行われ、6世紀後半頃に築造された、墳丘規模約7mの円墳であることが判明している。安中17号墳の埋葬施設は横穴式石室で、石室構築方法に切組積を採用している点で、安中市域でも稀有な例として知られる。小間古墳群が所在する段丘上より後閑丘陵を上ると、7世紀後半に築造されたおと塚古墳（2）がある。おと塚古墳は昭和38年に群馬大学によって発掘調査が行われている。副室構成で截石切組積石室を有する特徴があり、前橋市に所在する宝塔山古墳と石室のプラン構成が



第4図 安中市地形図（安中市教育委員会2011年元に作成）



第5図 西台遺跡周辺の遺跡分布



第1表 遺跡分布

No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	遺跡種別	文献
★	西中Ⅰ・Ⅱ遺跡			○	○	○	○			聚落	本報告書
1	安中17号墳				○					古墳	1
2	めかと塚古墳				○					古墳	2
3	八重巻御跡					○				真・須恵器窯	2
4	周世遺跡					○				真・須恵器窯	2
5	猪子ヶ尾遺跡					○				須恵器窯	2
6	二反田遺跡					○				須恵器窯	2, 3
7	戸谷遺跡					○				製鉄	2, 4
8	万葉原古墳				○					古墳	2
9	雲橋山古墳				○					古墳	2
10	相模谷津横穴墓				○					横穴墓	2
11	吉ヶ谷遺跡				○		○	○	○	古墳、聚落、水田	5
12	沼田遺跡								○	沼田塙	6
13	荒爪遺跡						○			水田	7
14	大島田遺跡								○	水田	8
15	大島田Ⅱ遺跡								○	水田、沼田塙	6
16	植松・地尻遺跡	○	○	○	○	○	○			聚落、官衙	9
17	米山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	聚落	10
18	地尻・地尻Ⅱ遺跡	○			○		○	○	○	聚落、畠、水路	11
19	地尻Ⅲ遺跡					○	○			聚落	12
20	安中城Ⅰ・Ⅱ遺跡	○		○	○	○	○	○	○	聚落、畠、城館	13, 14

## 文献

- 1：安中市教育委員会 2012『市内遺跡Ⅰ－八幡平遺跡・向山遺跡・小峰遺跡・安中17号墳－』
- 2：安中市市史刊行委員会 2001『安中市史』第四巻 原始古代中世資料編
- 3：安中市埋蔵文化財発掘調査団 1998『二反田遺跡 一株式会社群馬プレスカントリークラブ ゴルフ場建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 4：群馬県教育委員会 1982『戸谷遺跡－平安時代製鉄遺構の調査－』
- 5：(公)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021『吉ヶ谷津遺跡(安中市0201遺跡)社会資本総合整備(活力・重点・補正)(一)下里見安中線(西毛広域幹線道路安中工区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 6：(公)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019『大島田Ⅱ遺跡・沼田遺跡 西毛広域幹線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 7：安中市教育委員会 1994『九十九川下流遺跡群2－平成4年度団体営圃場整備事業 九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 8：安中市教育委員会 1993『九十九川下流遺跡群1－平成3年度団体営圃場整備事業 九十九川下流地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 9：安中市埋蔵文化財発掘調査団 2005『植松・地尻遺跡－店舗建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 10：(公)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2021『米山遺跡 社会資本総合整備(活力・重点・補正)(一)下里見安中線(西毛広域幹線道路安中工区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 11：安中市教育委員会 1991『地尻遺跡・地尻Ⅱ遺跡－都市計画街路下の尻・茶屋町線取付道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 12：安中市教育委員会 2009『地尻Ⅲ遺跡－安中住宅団地分譲に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 13：安中市教育委員会 2011『安中城Ⅰ・Ⅱ－安中市文化センター駐車場建設事業・安中市立安中小学校校舎合建代替事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 14：安中市教育委員会 2020『安中城Ⅲ－安中地区学童クラブ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』



酷似していることが指摘されている。

本遺跡より秋間川をはさんだ対岸には秋間丘陵がそびえる。秋間丘陵はいくつかの支群で形成されており、これらの支群では7～8世紀代に秋間古窯跡群として大規模な窯業生産が行われたことで知られる。秋間古窯跡群の中でも八重巻窯跡（3）、苅根遺跡（4）は群馬大学によって昭和期に発掘調査が行われている。いずれも7世紀後半から9世紀の期間に操業していたことが調査によって判明した。八重巻窯跡については、八重巻窯跡で生産された瓦が、前橋市山王庵寺の創建期に供給されていたことでも知られる。八重巻窯跡の北西側には雉子ヶ尾遺跡（5）が所在しており、7世紀末～8世紀代に操業していた須恵器窯跡が確認されている。同じ須恵器窯跡の遺跡としては二反田遺跡（6）がある。窯の操業はおおむね8世紀代であることが発掘調査から出土した須恵器で判明している。また、平安時代には製鉄遺跡の可能性が指摘されている戸谷遺跡（7）も存在する。

これら生産遺跡と対応する多くの古墳も確認されている。万福原古墳（8）はめおと塚古墳とともに截石切組積石室を有する古墳であり、八重巻窯跡や雉子ヶ尾遺跡との距離的にも近いことから両者の関係が指摘されている。苅根遺跡が所在する支群には崇徳山古墳（9）、八重巻窯跡の南側の支群である相水谷津支群には相水谷津横穴墓（10）が確認されている。また吉ヶ谷津支群では吉ヶ谷津遺跡（11）があり、中・近世の遺構とともに古墳時代終末期に比定される円墳が確認されている。

以上の遺跡は、丘陵および丘陵線の段丘上に位所在する遺跡群である。秋間川、九十九川によって形成された低地部に目を向けると、秋間川の低地部では近世の畠跡を確認した沼田遺跡（12）がある。また、九十九川の低地部では古代の水田跡の可能性が指摘されている荒浜遺跡（13）、近世の水田・畠跡を検出した大島田遺跡（14）、大島田II遺跡（15）がある。

本遺跡より九十九川の対岸には安中台地が市域の東西に延びる。安中台地上は直接的な遺構はみつかっていないものの、古代東山道の推定ルートが通る場所でもあり、交通の要衝としても注目されている。安中台地における古墳時代の遺跡は、6世紀代の植松・地尻遺跡（16）があげられる。また、安中台地の北側下位段丘と中位段丘上には展開する集落である米山遺跡（17）でも4世紀・5世紀後半、6世紀代などの古墳時代の集落が確認されている。米山遺跡は弥生時代から古代にかけての集落跡で、安中台地上では米山遺跡ほど長期にわたって利用されていた遺跡は現在までのところ皆無である。また、7世紀以降の住居出土遺物に須恵器が多数占めることから、秋間古窯跡群の須恵器の集積地であったことが想定されている。

隣接には官衙的性格を備えていたと推定される植松・地尻遺跡がある。また、植松・地尻遺跡付近に所在する地尻遺跡・地尻II遺跡（18）、地尻III遺跡（19）、安中城I・II遺跡（20）などの遺跡からは古代の集落跡も確認されている。安中台地上の発掘調査数が多いこともあるが、比較的集落の密度が高く、中・近世にも安中城や安中宿が位置する場所である。そのため、古代以来、安中台地上の当該地が中心域として利用されてきたことがわかる。

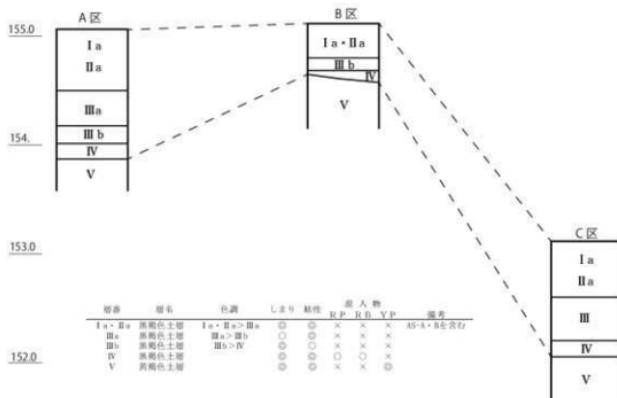


## IV 基本層序

本遺跡は秋間川沿いに位置する段丘上の縁辺に展開しており、地形としてA区からC区にかけて緩やかに傾斜する。A区ではIa・IIa層(AS-A～AS-Bの混土層)からV層(ローム層)までの堆積を確認した。A区ではIa・IIa層の堆積が60cm程度あり、崖際に向かうほどより厚く堆積する。IIIa・IIIb層(古墳・古代相当層)も約50cm堆積しており、基本的にこのIII層から遺物・遺構を検出した。IV層は部分的に確認する程度で、平均して堆積は薄い傾向にある。

B区西端は、隣接のA区と異なりIa・IIa・III層が非常に薄い。そのため、遺構検出面は部分的に残存していたIII・IV層ないしV層で検出した。B区西側は、調査対象区内で最も標高の高くなる地点であり、ここからC区方向に向かうにつれて地形的に傾斜する。そのため、B区東端では、西端よりもIII層が厚く堆積している様相が確認された。

C区は調査対象区で最も標高が低くなる。堆積状況はA区と大きく変わらない。東端の崖際ではB区の最高標高値と4m程度の比高差がある。



第6図 基本土層



V 遺構と遺物

1 弥生時代





## 1 弥生時代

### Y-1号住居（第7図、第11図）

住居の規模は約4.8m×5.3m。住居の一部にカクランを受ける。調査区内では炉など燃焼施設を確認できなかった。調査区外に存在すると考えられる。3号ピットは柱穴と考えられる。位置から考えて1号ピットと2号ピットのいずれかは主柱穴の可能性があるものの、浅い。遺物は東側廻に集中し、壺（1）、高杯（2）、甕（3）、高环（6）等が床面直上か床面より数cm浮いて出土している。

### Y-2号住居（第8図、第11図）

住居の一辺は約3.9mあるが、北側は調査区外になるため全体の規模は不明である。1号ピットは比較的浅いが、位置から考えて1号・2号ピットが柱穴になる可能性が高い。本住居は隣接する2号溝に切られる。出土遺物は少なく、住居覆土2層からS字甕の口縁部片（4）と床直から壺・甕の底部（5）が確認された。本住居を切る2号溝が古墳前期に比定され、なおかつ本住居の出土遺物から判断すると、弥生終末から古墳前期に比定される可能性が高い。

### Y-3号住居（第8・9図、第11・12・13図）

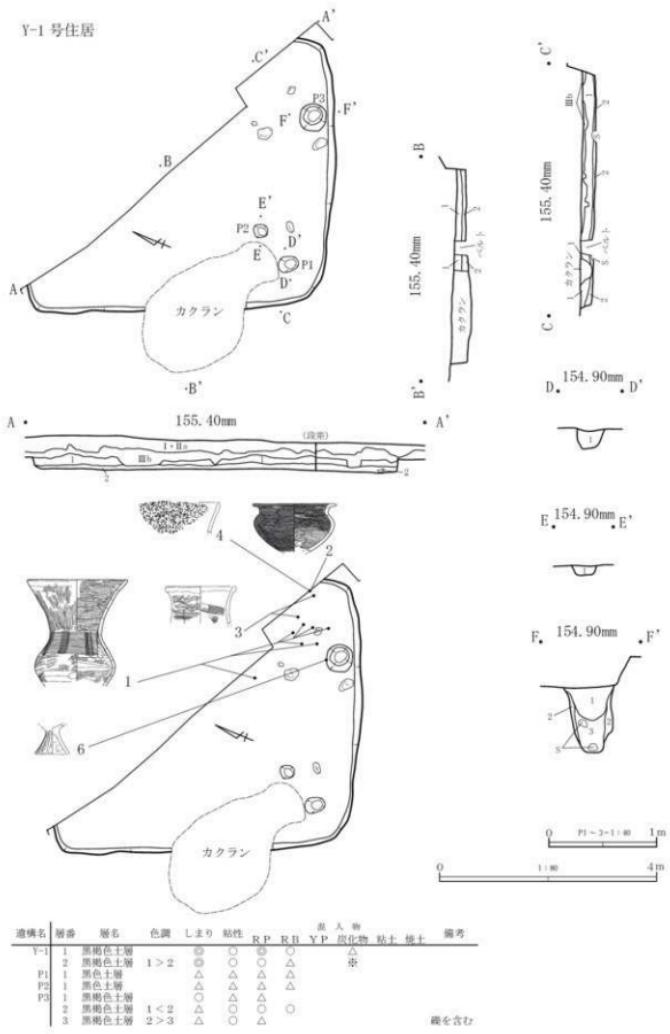
北側はA-A'のラインが元の調査区壁面であったが、可能な限り拡張を行った。調査区内で検出した壁面（南西側）は約5.3mである。東側をH-5号住居に切られる。炉は中央のやや北側寄りにある。1号ピット、4号ピットが主柱穴と考えられる。南西側の床面には帯状の高まりが確認された。遺物は壺（1、2）、甕（4、6）、片口土器（7）、甑（8）、高环（11）、台付甕（12）などの多くが床面から確認された。出土遺物から弥生後期に比定される。

### Y-4号住居（第10図、第13図）

Y-4号住居は約3.5m×3.6mでほぼ正方形を呈する。住居内から4つのピットが検出されており、それぞれ主柱穴になると考えられる。住居内覆土は20～30cmと浅い。北西隅をH-13号住居に切られる。切り合い関係はないが、H-1・2号住居が隣接して存在する。出土遺物は弥生後期の土器破片が主体を占め、本住居全体から出土した。S字甕（1）、小型壺（3）等の土器も確認されるが、いずれも隣接住居側から出土しており、混入したものと推測される。出土遺物から弥生終末前後の時期と考えられる。

### Y-5号住居（第10図、第13図）

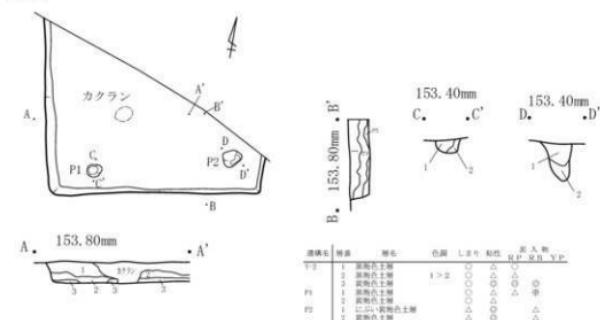
H-4号住居を掘り下げている中で、北西の辺と南側の辺の一部、1号ピットのみ確認した。1号ピットは主柱穴になる可能性が高い。H-4号住居に切られる。出土遺物には高环の脚と杯の接合部片と弥生後期の甕の口縁部片があるが、耕作によるカクランがひどいため、住居に伴うものとはいえない。本住居を切るH-4号住居が古墳前期に比定されることから、本住居の時期はそれ以前となる。



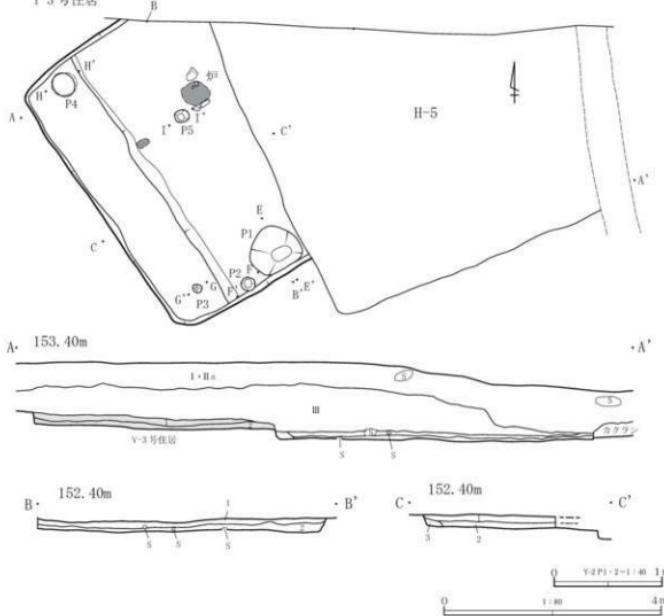
第7図 Y-1号住居址



Y-2号住居

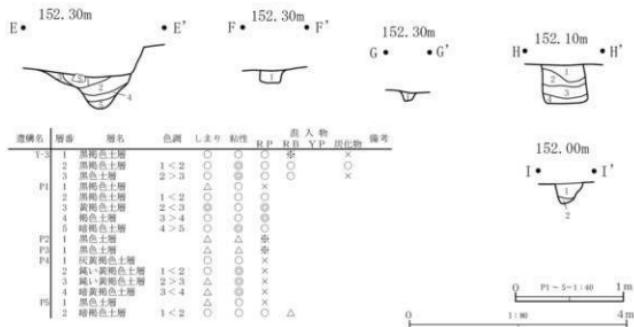
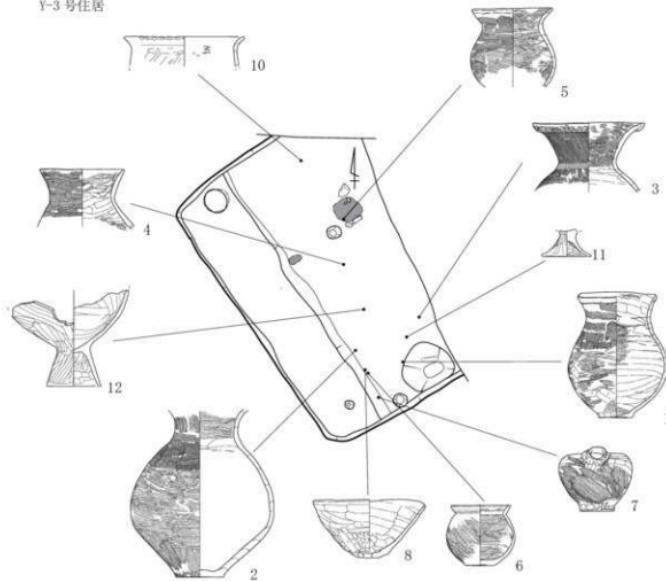


Y-3号住居



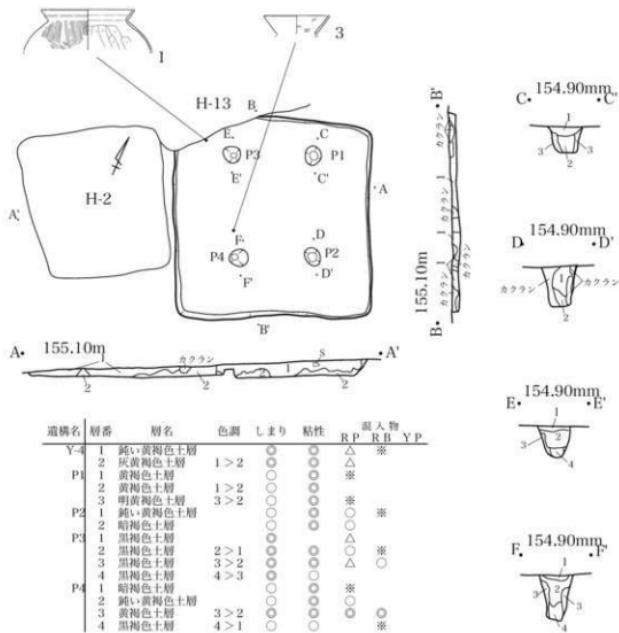
第8図 Y-2号住居址、Y-3号住居址(1)

Y-3号住居

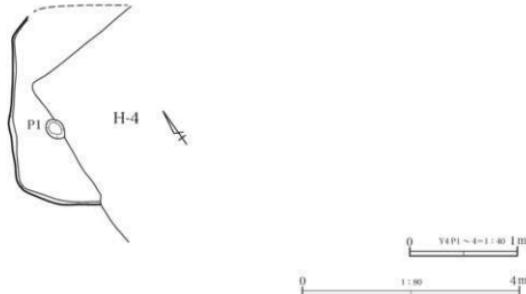


第9図 Y-3号住居址 (2)

Y-4号住居



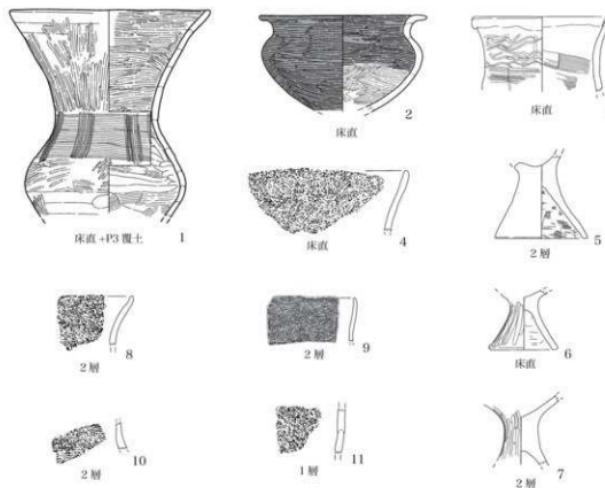
Y-5号住居



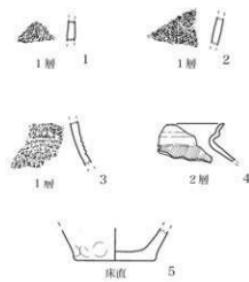
第10図 Y-4号住居址、Y-5号住居址



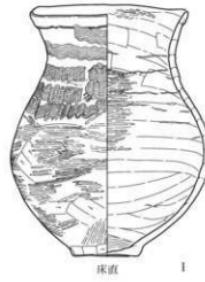
Y-1号住居



Y-2号住居



Y-3号住居

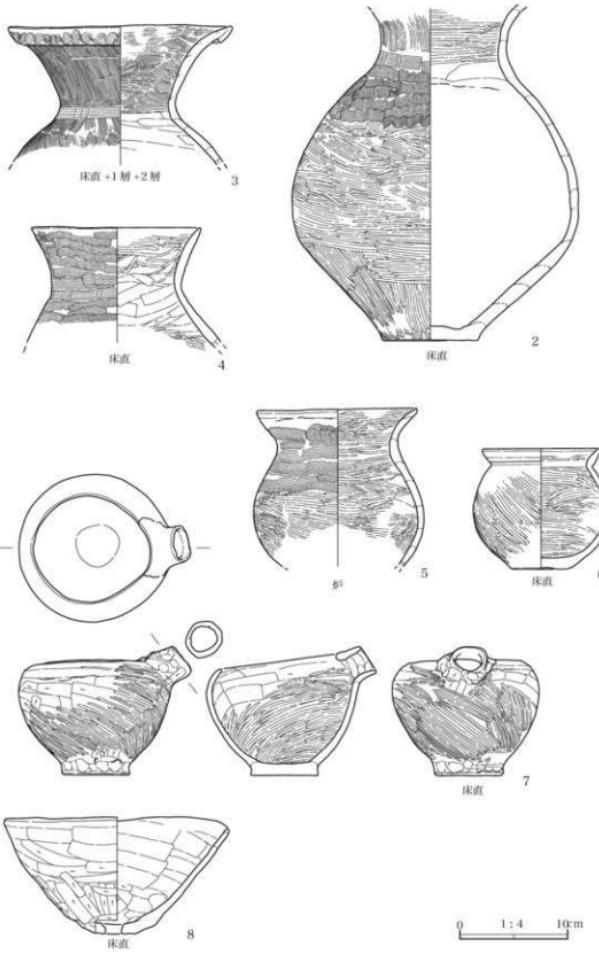


0 1 : 4 10cm

第11図 Y-1・2・3号住居出土遺物



Y-3号住居

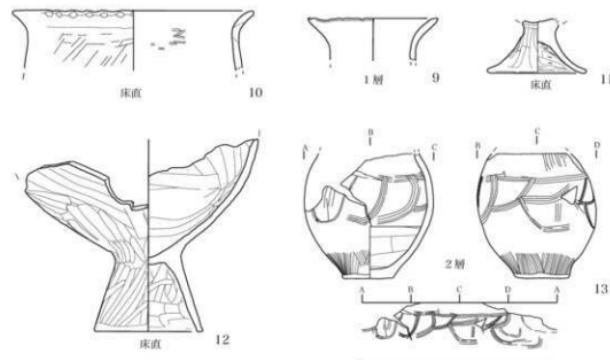


0 1:4 10cm

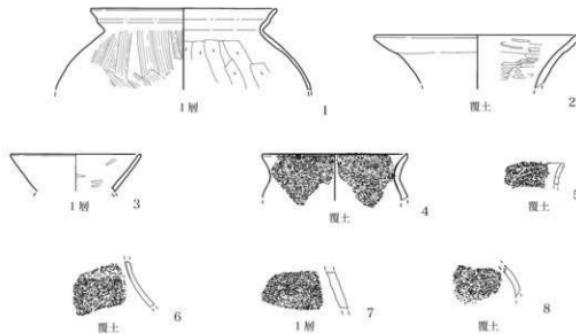
第12图 Y-3号住居出土遗物



Y-3号住居



Y-4号住居



Y-5号住居



第13図 Y-3・4・5号住居出土遺物



## 2 古墳時代







## 2 古墳時代

### H-1号住居（第14図、第28図）

本住居はH-2号住居、H-13号住居に切られるため規模は判然としない。住居内覆土は浅く、多くの部分で耕作によるカクランを受けていた。住居内北西に1号ピットを検出している。出土遺物はカクランを受けていない床面から壺（1）が一点出土している。出土遺物と他の住居との切り合い関係から古墳前期に比定されると考えられる。

### H-2号住居（第14図、第28図）

H-2号住居の規模は約2.4m×2.7m。住居内からは3か所のピットが検出された。このうち住居中央に位置する2号ピットが主柱穴になると考えられる。重複関係は本住居がH-1号住居を切る。出土遺物は少なく、ほとんどが破片であったが南西隅の1号土坑内の2層から高环の脚部（1）が出土した。重複関係と出土遺物から古墳前期に比定されると考えられるが、H-1号住居とはあまり時期差はないものと考えられる。

### H-3号住居（第15図、第28図）

住居平面規模約4.2m×4.3mのほぼ正方形を呈する。東辺に沿うように3つの小穴を検出した。南西では土坑を1基検出した。また、住居北側では浅い掘り込みを検出した。主柱穴と考えられるピットは確認できず、東辺の小ピットが上屋を支える支柱の役割をはたした可能性が考えられる。出土遺物は壺（1、2）、S字壺（4）、高环（7、8）、台付壺（9）等の器種が確認されている。出土遺物から古墳前期と考えられる。

### H-4号住居（第15図、第29図）

住居平面規模約4.0m×4.0m。ややゆがみのある正方形住居である。Y-5号住居、H-14号住居と重複し、新旧関係はY-5号住居よりも新しく、H-14号住居よりも古い。主柱穴となるようなピットは確認されなかったが、住居中央付近に明確ではないものの炉跡と考えられる焼土集中を確認した。出土遺物は壺（1）、塙（3）、高环（5）などの器種が床面より確認された。遺物から古墳前期と推定される。

### H-5号住居（第16図、第17図、第30図）

調査区内で検出した壁面（南側）は約6.8mである。東側を溝状のカクランで一部切られる。1号ピット、4号ピットが主柱穴と考えられる。2号ピットは径が小さいが深く、支柱等の可能性がある。小型壺（7）、壺（2）、高环（12）、S字壺（4、5）などの土器が多く出土した。出土遺物から古墳前期と推定される。

### H-6号住居（第17図、第30図）

住居規模不明。カマドと考えられる粘土塊と焼土塊を検出したため住居とした。焚口が南向きであり、住居自体は調査区外であると考えられる。遺物は小型の壺（1）が一点出土しているが、本住居に伴うものは定かではない。

#### H-7号住居（第18図、第30図）

調査区内で検出した東側壁面は約4.2mである。本住居はH-8号住居に切られる。カマドは北東方向に作られる。構築材は石と粘土である。本住居のカマドを再利用してH-8号住居のカマドが構築されている。柱穴などの土坑は確認できなかった。遺物は土師器杯（1、2）などが確認された。出土遺物やH-8号住居と時期差があまりないことを踏まえると古墳時代後期に比定される。

#### H-8号住居（第19図、第31図）

調査区内で検出した東側壁面は約3.8mである。壁周溝が巡る。H-7号住居を切る。カマドは東壁でやや南寄りに作られており、H-7号住居のカマドを再利用して作られている。構築材は粘土である。住居覆土中には炭化物を含み、床面直上に炭化材をブロック状に検出した。柱穴などのピットは確認できなかった。遺物はカマドおよび焚口の前面から甕（1）や長胴甕（2、3、4、5）を検出した。出土遺物から古墳後期と考えられる。

#### H-9号住居（第20図、第32図）

一辺約6.8mで住居の北半は調査区外のため確認できなかった。覆土の掘下げ時に炭化物層が確認された。そのため消失住居であると考えられる。床面には壁周溝が巡る。住居内には3つのピットを検出した。このうち、2号ピット、3号ピットは主柱穴になるとと考えられる。坏（1、2、3）、甕（5）、鉢（4）などの遺物が出土しており、滑石製白玉を1点確認した。出土遺物から古墳後期と考えられる。

#### H-10号住居（第21図、第32図、第33図）

住居の東側は全面的にカクランを受けており、東側の壁のラインは推定である。北側の一辺は推定で約5.0mである。H-15号住居に切られる。炉など燃焼施設は確認できなかった。住居の掘り込みは非常に浅く、検出面から15～20cm程度である。1～3号ピットは位置的に主柱穴と考えられるが、深さが一定でない。遺物は長胴甕（6）、甕（7）、坏（1、2、3、4、5）等が出土した。出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

#### H-11号住居（第22図、第33図、第34図）

住居の規模約2.5m×3.0m。カマドは住居の東辺中央付近に備え付けられており、カマドに隣接した南側には貯蔵穴と考えられる土坑を1基検出した。北西隅では1号ピットを確認した。主柱穴となるようなピットは確認できなかったが、1号ピットがそれに該当すると考えられる。出土遺物はカマド焚口前面の床から長胴甕（10）が、袖に埋め込まれるように土師器杯（4）等が確認された。なお、本住居では、唯一の須恵器甕が確認されているが、カクラン中からの出土したものであり、本住居に伴うものではないと考えられる。出土遺物から古墳後期に比定される。

#### H-12号住居（第23図、第34図、第35図）

住居の中心軸上の長さが4.4mを測る。南北の辺は調査区外になるため、住居全体の規模は不明である。東辺中央付近にカマドが据え付けられている。カマドに隣接した南側には貯蔵穴と考えられる土坑が確認された。1号・2号ピットは比較的浅く、2号土坑は複数のピットが合わさって形成されたものと考えられる。小型甕（8、9）、壺（11）、坏（2、6）、鉢（10）などの土



器が出土した。出土遺物から古墳後期に比定される。

#### H-15号住居（第24図、第36図、第37図）

住居の規模は約3.0m×4.5m。H-10号住居を切る。カマドは北東方向にあり、やや東側に寄っている。構築材は石と粘土である。位置的に1～4号ピットは主柱穴の可能性があるものの、1号・2号ピットは比較的浅い。南側の角と東西方向にそれぞれく乱を受けている。遺物の出土量は非常に多く、長胴甕（18、19、20）、壺（1、2、3、4）、壺（15）、甕（13、14、16、17）などの土師器と盤状高壺（11、12）、蓋（7、8、9、10）などの須恵器が出土した。遺物から古墳終末期に比定される。

#### H-16号住居（第25図）

住居の北西部分のみ確認した。北東部辺ではカマドも検出している。遺物は土師器の小片が1点出土する程度であった。

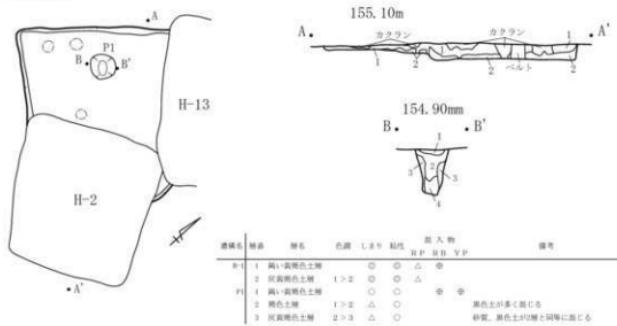
#### 2号溝（第26図、第38図）

B区調査区東端で検出した。2号溝は南東から北西方向へ走行しており、Y-2号住居の一部を切る。溝の形態は直堀のコの字形を呈する。7層ではシルト質の水性堆積層が確認され、上層である6層からS字甕（1、2）などの土器片をいくつか確認した。溝の底面からは遺物は一切検出されなかった。6層中の出土遺物に大きな時期差はないことから、古墳時代前期に溝が機能していたと考えられる。

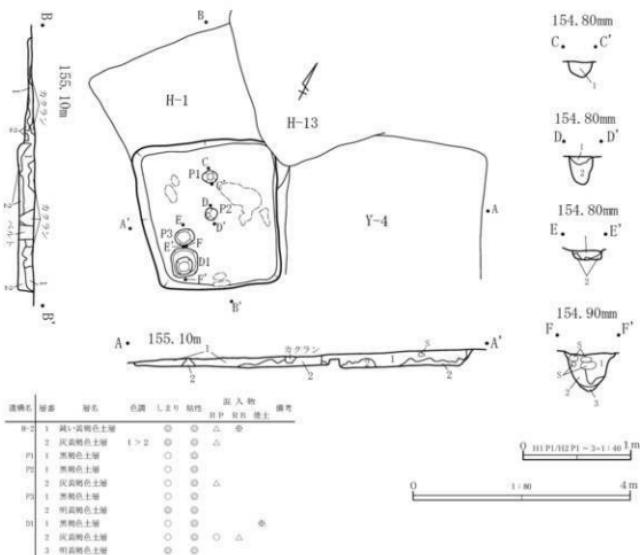
#### 1号竪穴状遺構（第27図、第38図）

規模は約6.8mである。中央部分に円形形状のマウンド、周りには長方形の土坑があり、周溝墓の可能性を考えたが、埋葬施設を検出できなかった。性格不明の竪穴状遺構である。出土遺物は弥生土器片（1、2、3）、S字甕（4）小型の壺（5）、壺（8）などの遺物が確認された。遺物から古墳時代前期と考えられる。

## H-1 号住居

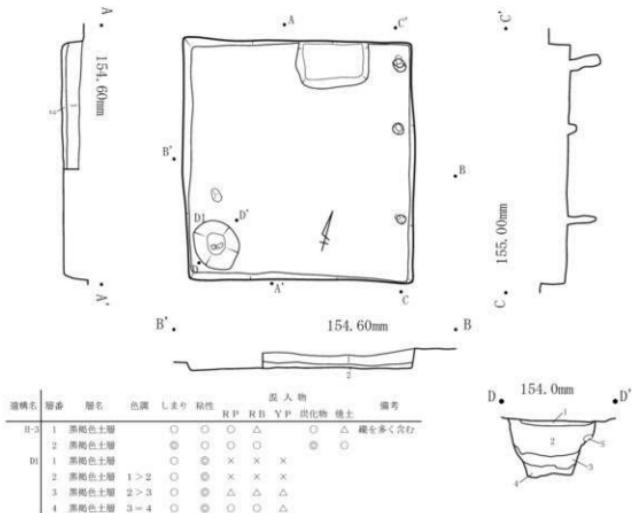


## H-2 号住居

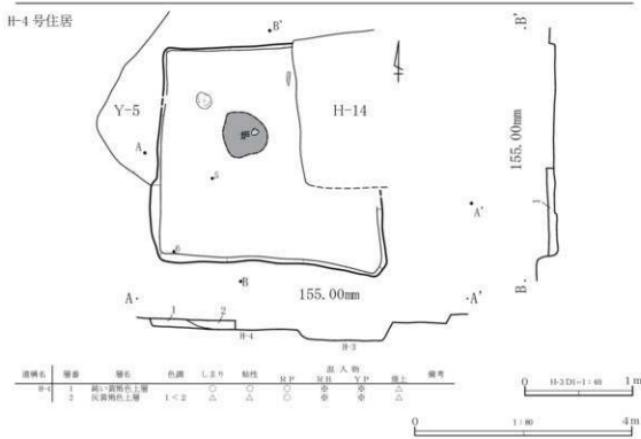


第14図 H-1号住居址、H-2号住居址

H-3号住居



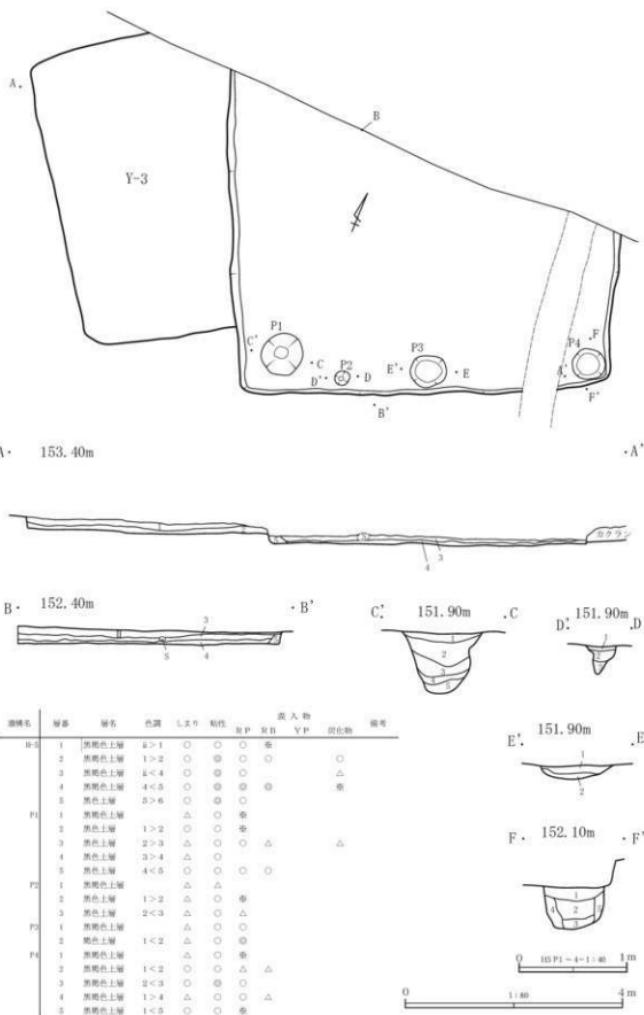
H-4号住居



第15図 H-3号住居址、H-4号住居址

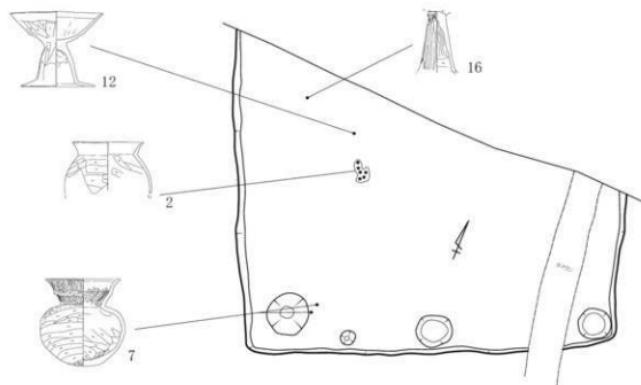


H-5号住居

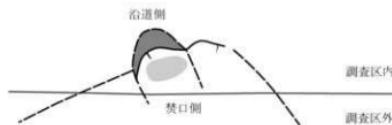
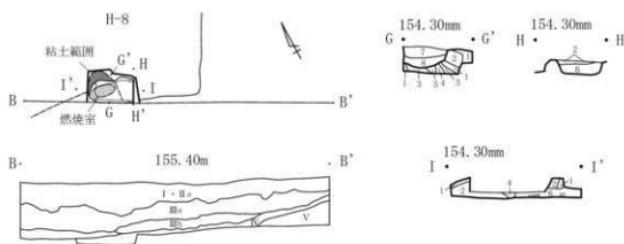


第16図 H-5号住居址 (1)

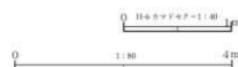
H-5号住居



H-6号住居

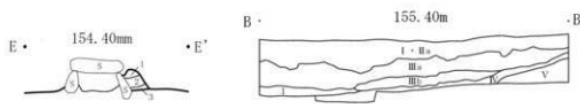
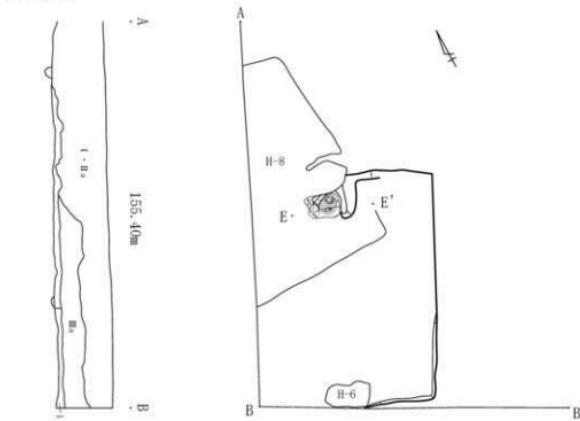


H-6推定概念図



第17図 H-5号住居址(2)、H-6号住居址

H-7号住居



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	R P	R B	基入物	植土	検土	備考
H-6 (カマド)	1	黒褐色土層	1 < 2	△	○				○	△	委
	2	黒褐色土層	2 < 3	△	○				○	△	2層と3層の混合層
	3	黒褐色土層	3 < 4	△	○				○	△	植土壤 (5層が混じる)
	4	赤褐色土層	4 > 5	△							
	5	褐色土層	5 < 6	○	○						
	6	暗赤褐色土層	6 < 7	○	○						
	7	褐色土層	7 > 8	○	○						
	8	黒褐色土層	7 > 8	○	○						
H-7 (カマド)	1	黒褐色土層	v > 2	○				x	x	△	
	1	黒褐色土層	1 > 2	○	○			x	△	x	
	2	黒褐色土層	2 > 3	○	○			x	△	x	
	3	黑色土層									

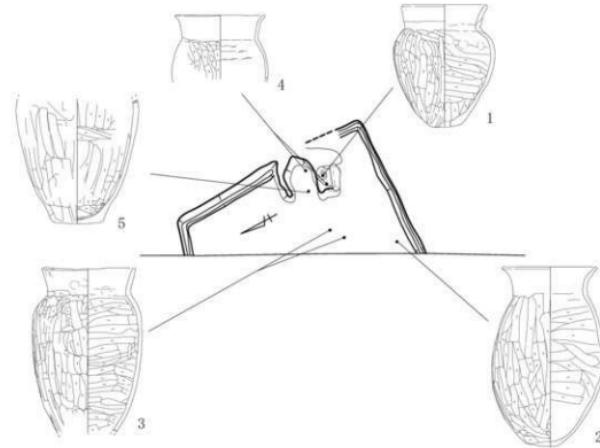
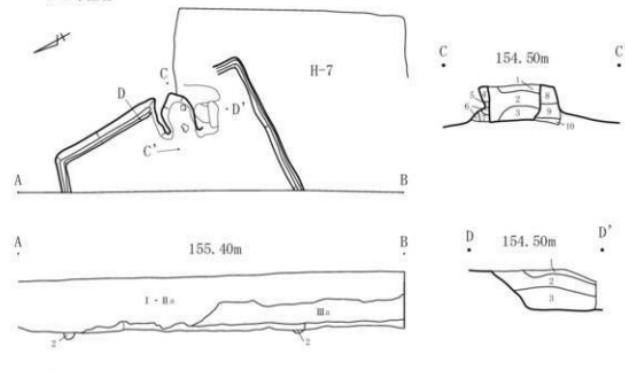
0 H-7 カマド 1:40 1m

0 1:80 4m

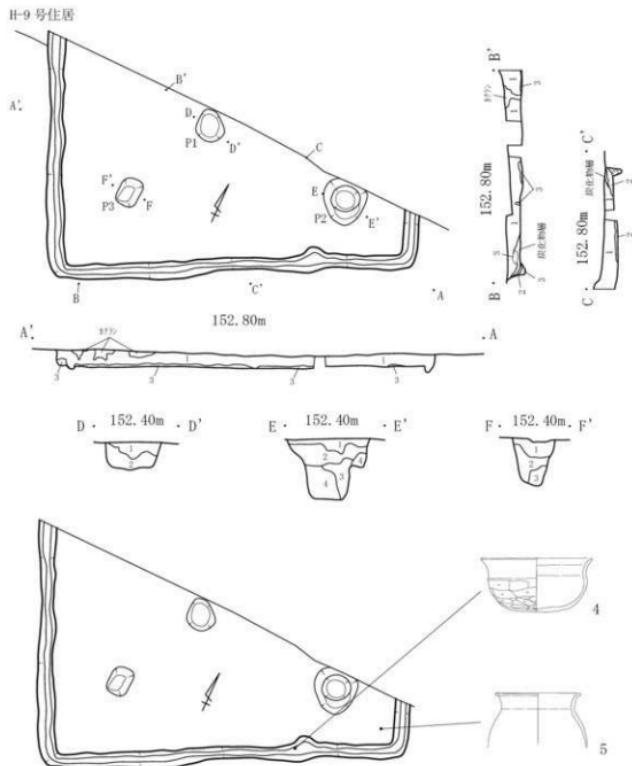
第18図 H-7号住居址



H-8 号住居



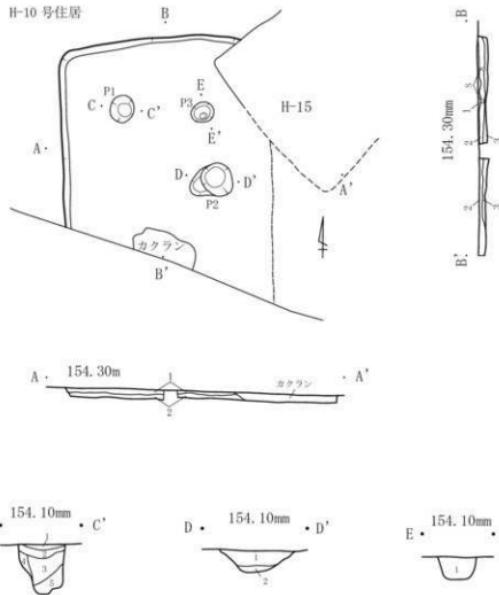
第19図 H-8号住居址



土壤名	剖面	層名	色調	L.S.号	粘性	測定物			地土	備考
						R.P.	R.B.	V.P.		
H-9		1 砂質色土層	○		△	△	△	△		
		2 黃褐色褐色土層	△		△	×	×	△	○	
		3 黑褐色土層	○		○	×	×	×		
P1		1 黑褐色土層	○		○	×	×	×		
		2 黑褐色土層	2<1		○	△	△	△		
P2		1 黑褐色土層	○		△	●	×	×		
		2 黑褐色土層	2<1		○	△	△	△		
		3 黑褐色土層	3>1		○	○	△	△		
P3		4 黑褐色土層	○		○	△	△	△		
		1 黑褐色土層	2<1		○	●	●	×		
		2 黑褐色土層	○		○	●	×	×		
		3 棕色土層			x	×	×	×		

○ PI = 3.1 (40) 1m  
1:80 4m

第20図 H-9号住居址

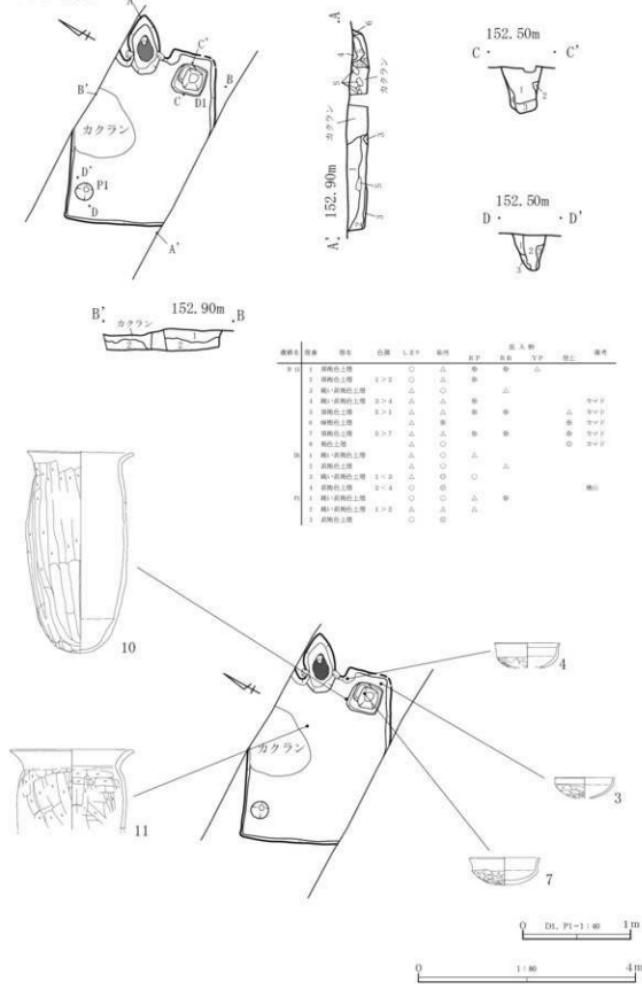


遺構名	番号	層名	色調	しまり	粘性	面入和 RP	面入和 RB	備考
H-10	1	黒色土層		○	○	*		
	2	黒褐色土層	1 < 2	○	○	○	△	
	3	黄褐色土層		○	○	○	○	
P1	1	黑色土層		△	△	△		
	2	黑色土層	1 < 2	○	△	△	△	
	3	黑褐色土層	2 < 3	○	○	○	○	
	4	褐色土層	3 < 4	○	○	○	○	
	5	黑褐色土層	3 > 5	○	○	○	△	
P2	1	黑色土層		○	△	○		
	2	黒い黄色土層	1 < 2	△	○	○	△	
P3	1	褐色土層		△	○	○	○	

Scale bars: 0 to 1m for the top section, 0 to 4m for the bottom section, and 1:80 for the detailed view.

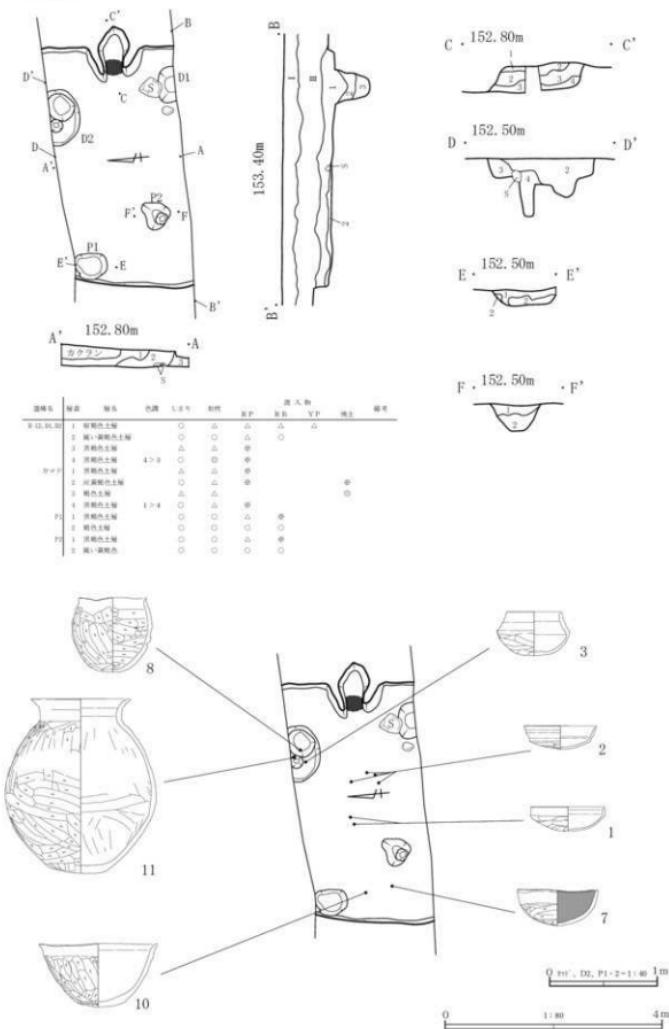
第21図 H-10号住居址

H-11号住居



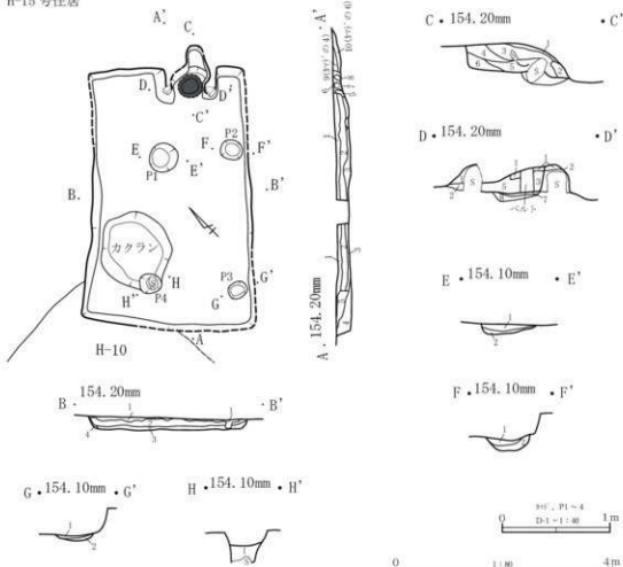
第22図 H-11号住居址

H-12号住居



第23図 H-12号住居址

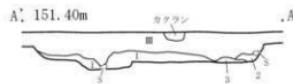
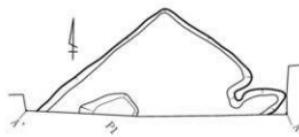
## H-15号住居



構造名	層番	層石	色調	しまり	粒性	R P	R B	表人物	炭化物	粘土	地土	備考
H-15	1	黒色土層	○	○	中	△	○	△	△	△	△	黒褐色土(裏の1層と同じ)
	2	黄褐色土層	1<2	○	○		△	●				
	3	黄褐色土層	2>3	○	○		○	○				
	4	オリーブ褐色土層	3<4	○	○		○	○				
	5	褐褐色土層	1<5	○	△		△	○				
	6	褐褐色土層	1>褐1	○	△		△	○				
	7	暗赤褐色土層	褐2>褐3	○	○		○	○				
	8	暗灰黄色土層	褐3>褐4	○	○		○	○				
	9	黑褐色土層	褐9>褐4	○	△		○	○				
	10	黄褐色土層	褐5<褐6	○	○		○	○				
カマY	1	黄褐色土層	○	○	○	△	○	△	△	△	△	黒褐色土(裏の1層と同じ)
	2	褐色土層	1<2	△	○		○	○				
	3	黑褐色土層	1<3	○	○		○	○				
	4	黑褐色土層	3>4	○	△		○	○				
	5	黑褐色土層	4>5	△	○		○	○				
	6	黑褐色土層	5<6	△	○		○	○				
	7	赤色土層	6<7	△	○		○	○				
	8	暗赤褐色土層	7>8	△	△		○	○				
P1	1	黑色土層	△	△	△	△	○	△	△	△	△	黒褐色土(裏の1層と同じ)
	2	オリーブ褐色土層	1<2	△	△		○	○				
	3	黑色土層	△	○	△		○	○				
P2	1	黑色土層	1<2	○	○	△	○	△	△	△	△	黒褐色土(裏の1層と同じ)
	2	黄褐色土層	1<2	○	○		○	○				
P3	1	黑色土層	△	○	△	○	○	○	○	○	○	黒褐色土(裏の1層と同じ)
	2	黄褐色土層	1<2	○	○		○	○				
P4	1	黑色土層	△	○	○	○	○	○	○	○	○	黒褐色土(裏の1層と同じ)

第24図 H-15号住居址

H-16号住居

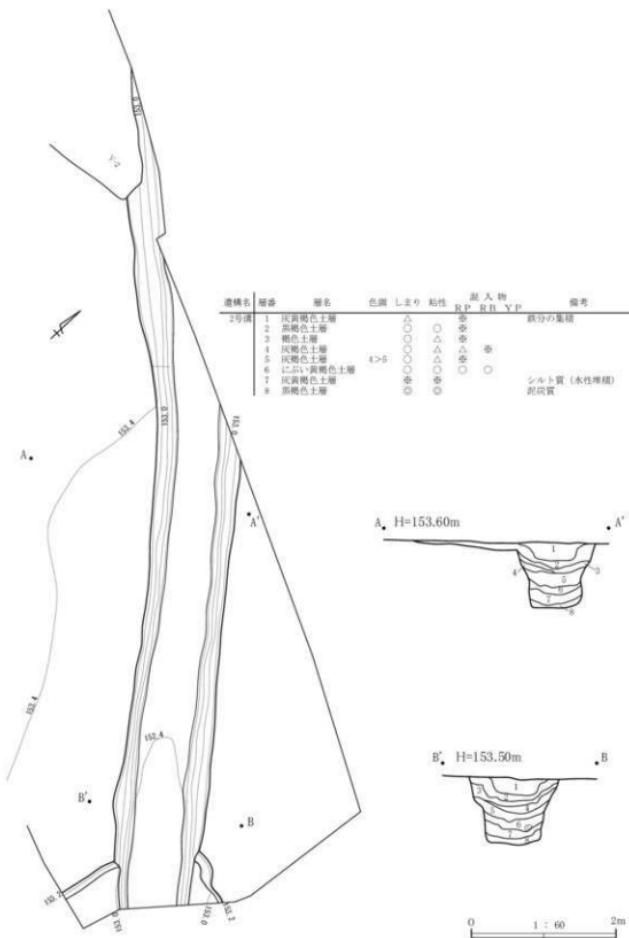


遺構名	層番	層名	色調	し土り	粘性	埋入物			炭化物	焼土	備考
						R.P	R.B	Y.P			
H-16	1	黄褐色土層	○	○	△	×	○	×	×	×	
	2	茶褐色土層	1<3	△	○	×	×	×	△	×	カマド
	3	茶褐色土層	4>1	△	○	×	×	×	○	○	カマド



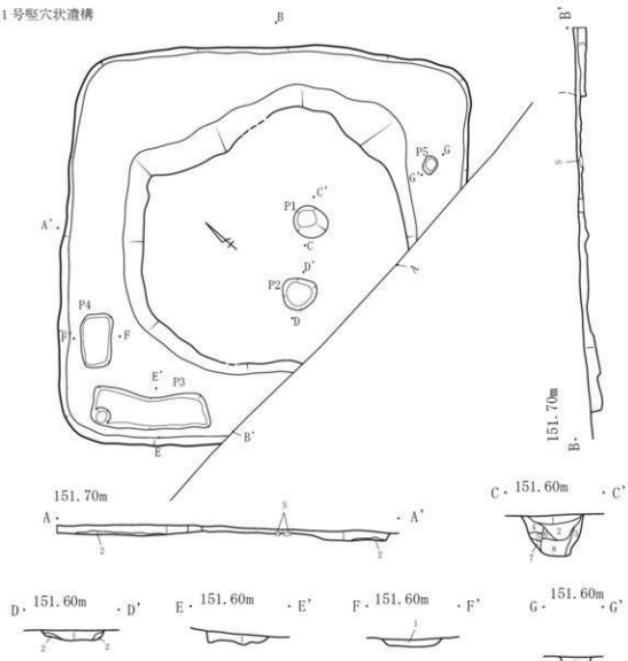
第25図 H-16号住居址

2号溝



第26図 2号溝

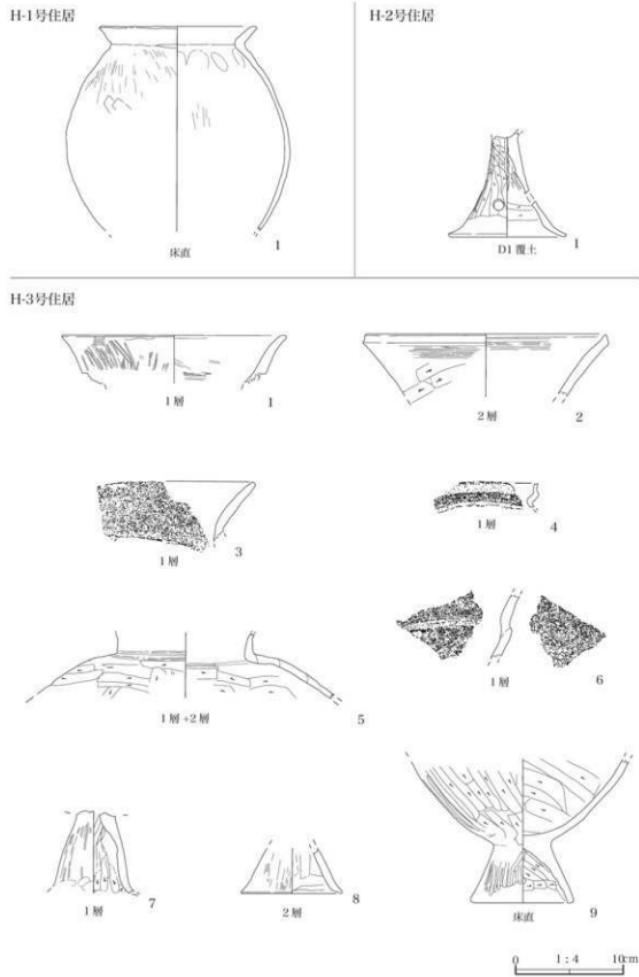
1号竖穴状遺構



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	R.P	混入物	R.B	堆土	備考
P1	1	黒褐色土層	○	△	△	*	×	○		
	2	褐色土層	1 < 2	△	△		○	○		
	3	黒色土層	1 > 3	○	○		×	×		
	1	黒褐色土層	○	○	△		○	○		
	2	黒褐色土層	1 > 2	○	○		×	×		
	3	黒褐色土層	2 > 3	○	○		×	×		
	4	黒褐色土層	1 < 4	△	○		△	○		
	5	土層	○	○	○		○	○		
P2	6	黒褐色土層	5 > 6	○	○		○	○		
	7	黒色土層	6 > 7	○	○		×	×		
	8	黒色土層	7 > 8	○	○		○	○		
	1	黒褐色土層	○	○	○		○	○		
	2	褐色土層	1 < 2	△	△		○	○		
	P3	1	黒褐色土層	○	△		○	○		
	P4	1	黒褐色土層	○	△		○	○		
	P5	1	黒褐色土層	○	○		△	△		

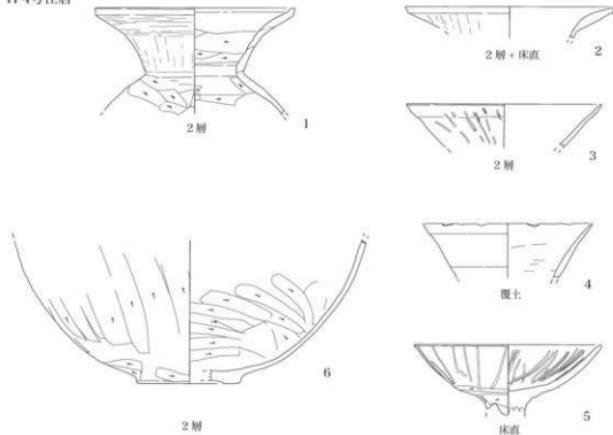
0 P1-5-1 : 60 1m  
0 1 : 60 4 m

第27図 1号竖穴状遺構

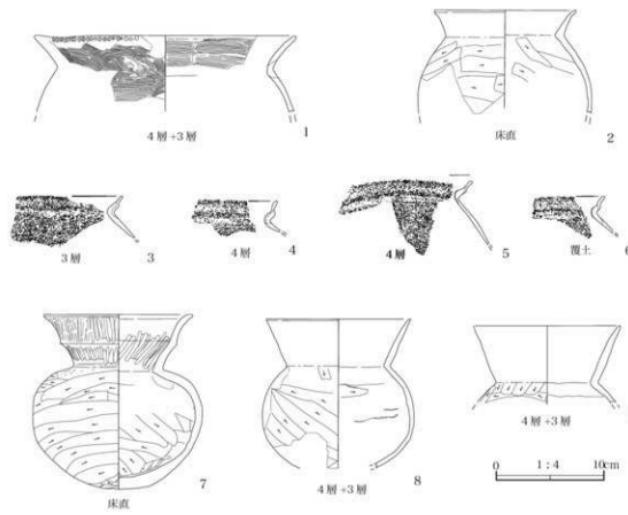


第28図 H-1・2・3号住居出土遺物

H-4号住居



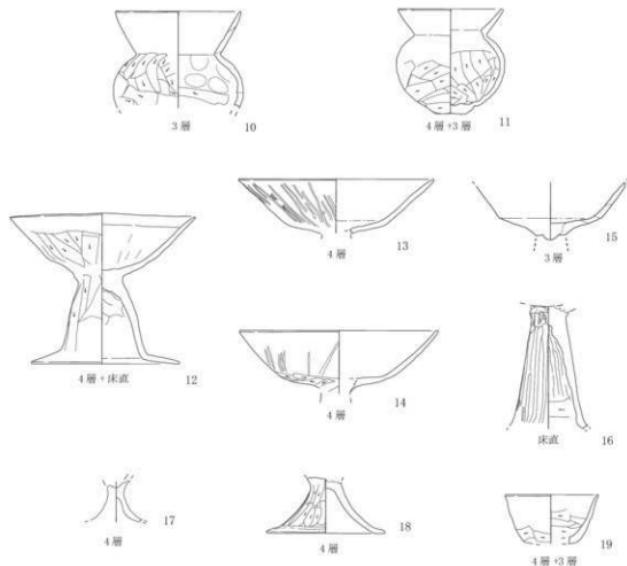
H-5号住居



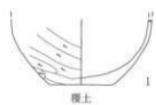
第29图 H-4·5号住居出土遗物



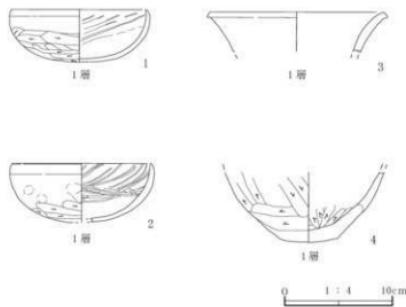
H-5号住居



H-6号住居



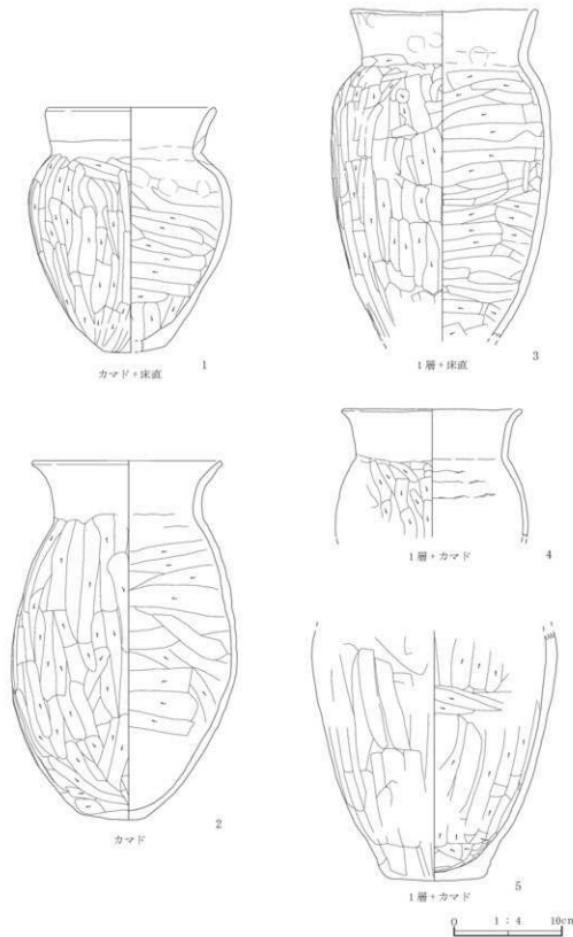
H-7号住居



0 1 : 4 10cm

第30図 H-5・6・7号住居出土遺物

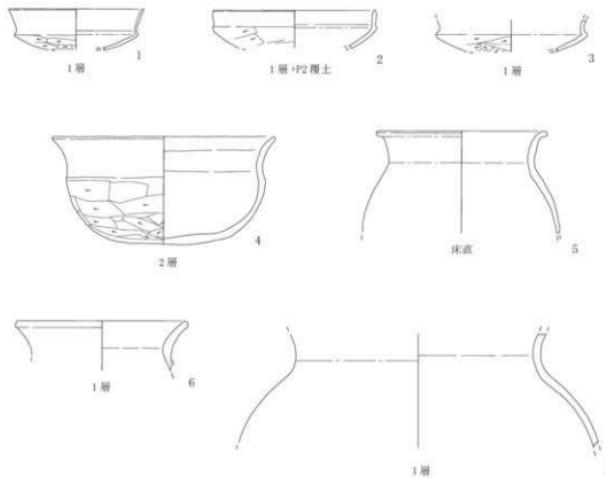
H-8号住居



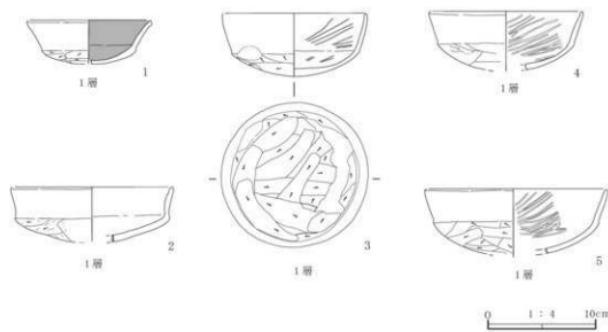
第31図 H-8号住居出土遺物



H-9号住居



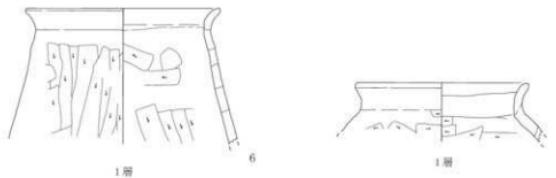
H-10号住居



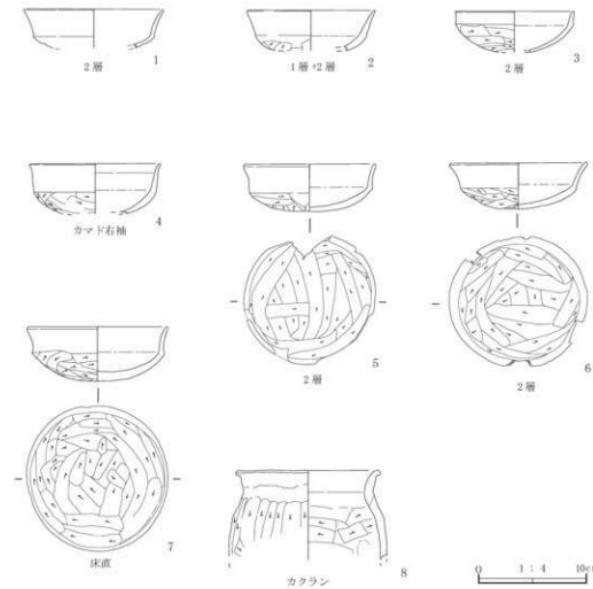
第32図 H-9・10号住居出土遺物



H-10号住居

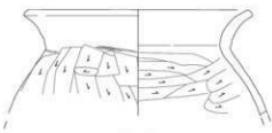
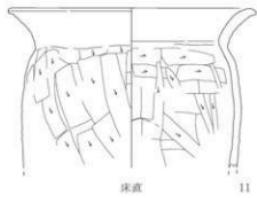
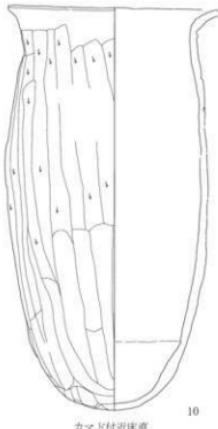
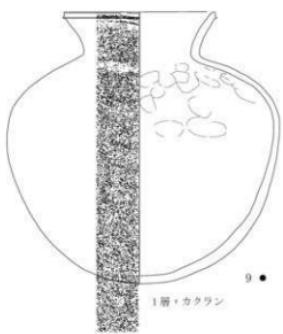


H-11号住居

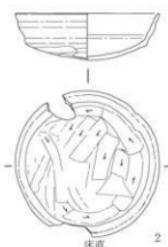
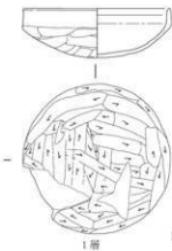


第33図 H-10・11号住居出土遺物

H-11号住居



H-12号住居

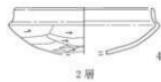


0 1 : 4 10cm

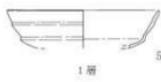
第34図 H-11・12号住居出土遺物



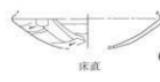
H-12号住居



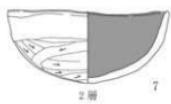
2層



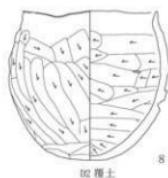
1層



床底



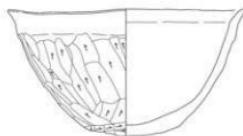
2層



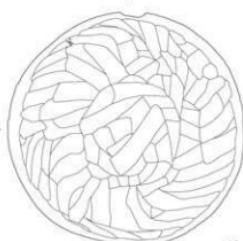
82 覆土



2層



10



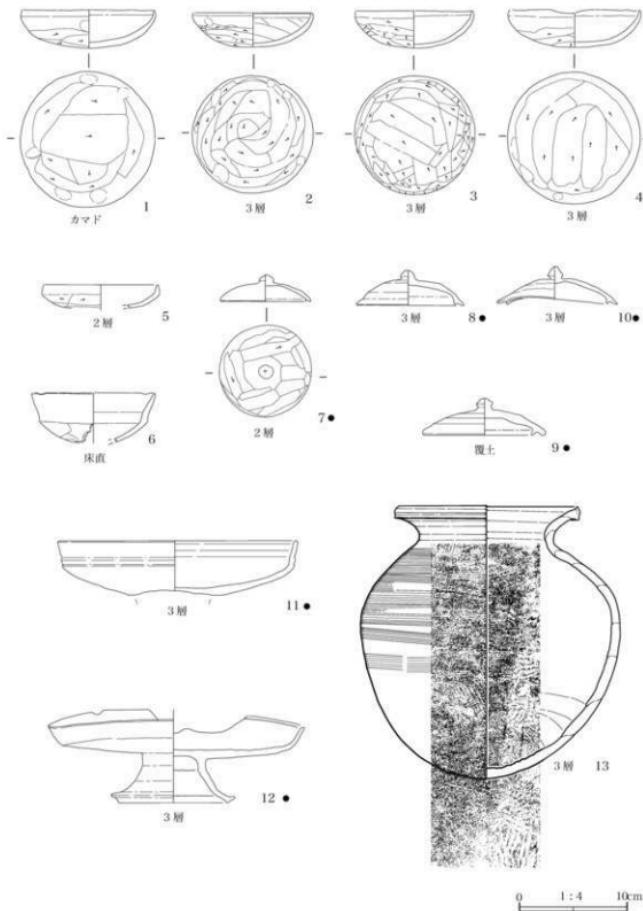
82 覆土

11

0 1 : 4 10cm

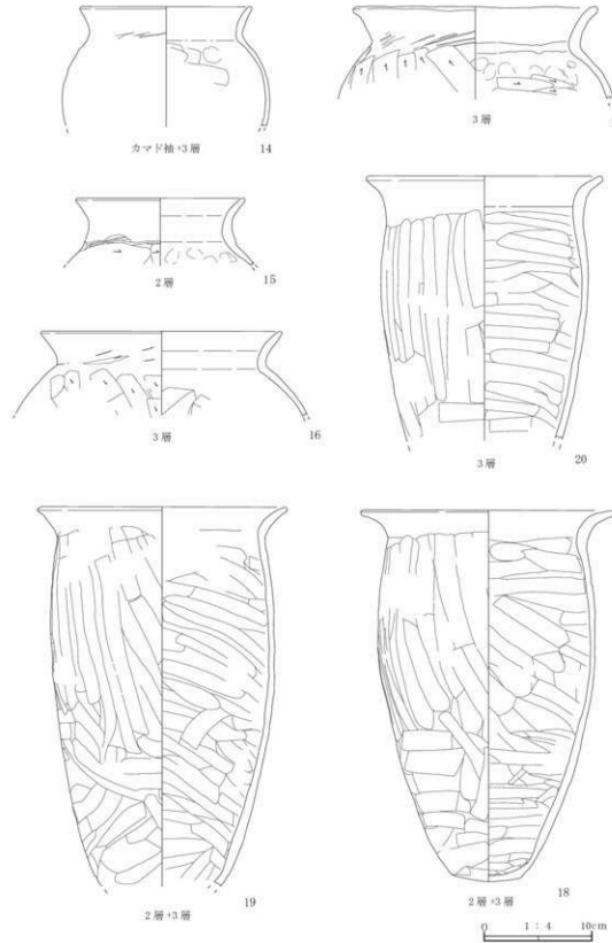
第35図 H-12号住居出土遺物

H-15号住居



第36図 H-15号住居出土遺物

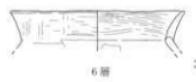
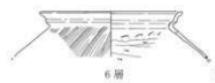
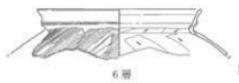
H-15号住居



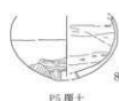
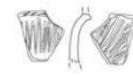
第37図 H-15号住居出土遺物



2号溝



1号竪穴状遺構



0 1 : 4 10cm

第38図 2号溝、1号竪穴状遺構出土遺物



3 古代





### 3 古代

#### H-13号住居（第39図、第41図）

北西側が調査区外にあたるため、住居全体の規模は不明である。短軸方向は約3mである。床面には2か所の焼土集中が検出されており、消失住居の可能性が高い。4基のピットが確認されており、いずれも掘り込みが浅い。位置から考えて、2号ピットと3号ピットが主柱穴になると考えられる。

遺物は土師器壺（1、2、3）、須恵器杯（4、5、6、7）須恵器蓋（11、12）、須恵器高台付皿（9）、鉄滓（16）等が出土している。出土遺物から奈良時代に比定される。

#### H-14号住居（第39図、第42図）

本住居はH-4号住居を掘り下げる過程で検出した。カクランを多く受けしており南側および北東側は明瞭に把握できなかった。出土した遺物量は多く張、（10、11）須恵器壺（1、2、3、4）、須恵器甕（8）須恵器蓋（5、6、7）等の遺物が出土した。出土遺物から奈良時代と推定される。

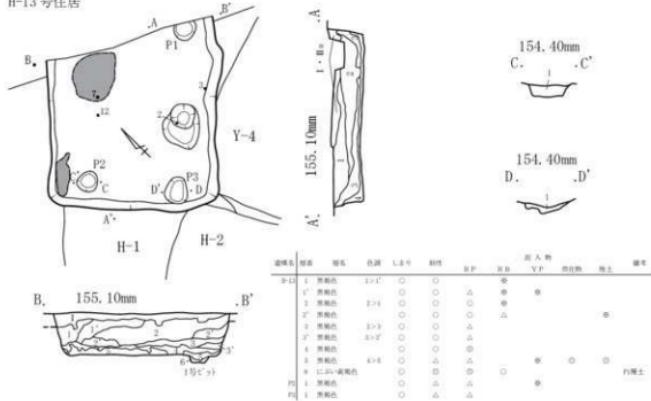
#### 1号溝（第40図）

A区調査区の東側で検出した。当初、第4トレンチおよび第2トレンチで検出した落ち込みを調査したところ、一続きの溝であることが判明した。溝の北側方向の走行状況を確認するため、第5トレンチを設定し、調査を行なった。

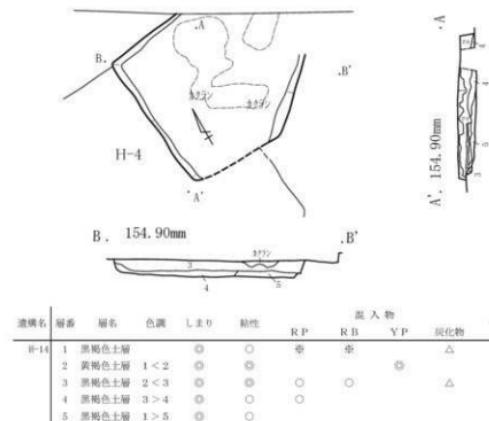
溝の幅は約2mを測る。断面形状はV字を基本とし、南側ではY字を呈する箇所もある。4層で水性堆積を確認したが、溝の埋没後に窪んでいた部分に水が流れた後と推測される。4層よりも下層では水性堆積は確認できなかつたため、掘削当初は空堀として機能していたものと推測される。

出土遺物は図化できるものではなく、須恵器片や土師器片が多少出土した程度である。溝断面形状や少ない遺物から判断して、古代に掘削・機能していた溝と推測される。

H-13号住居



H-14号住居



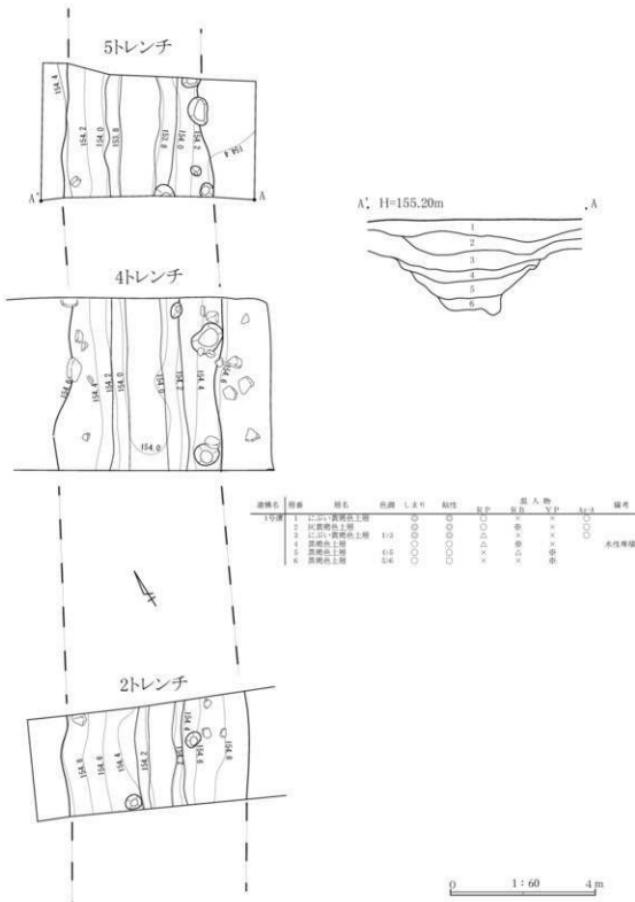
H-13 PI : 2-1 : 40 1m

0 1:80 4m

第39図 H-13号住居址、H-14号住居址



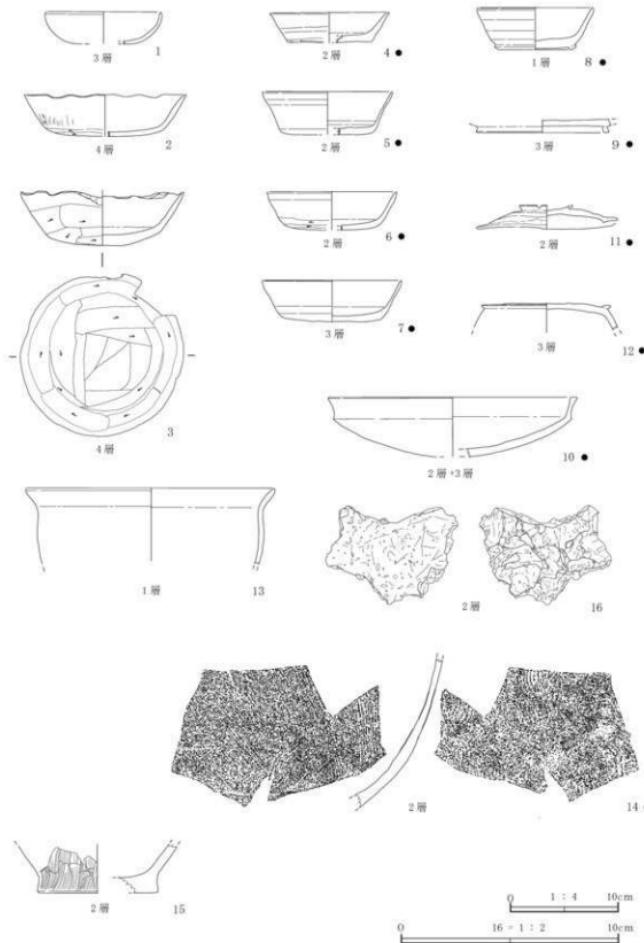
1号溝



第40図 1号溝



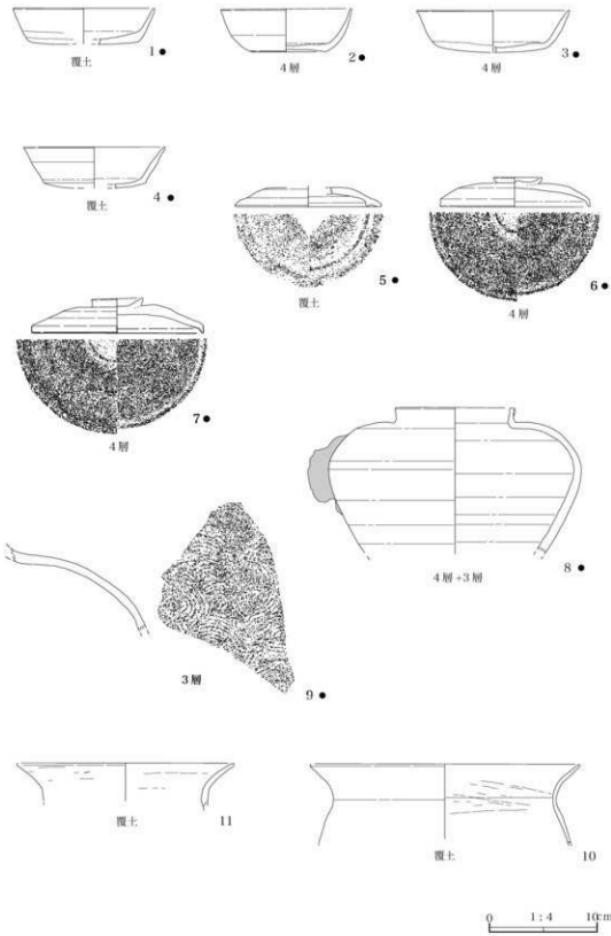
H-13号住居



第41図 H-13号住居出土遺物



H-14号住居



第42図 H-14号住居出土遺物





#### 4 その他の遺構・遺構外出土遺物

#### 5 出土石器について





#### 4 その他の遺構・遺構外出土遺物

##### 2号竪穴状遺構（第43図）

C区調査区東端で検出した。当初落ち込みを検出したため住居として掘り進めたが、北側および東側の立ち上がりが不明瞭で、なだらかに検出面へと繋がる状態になった。また、落ち込み内にはいくつかのピットおよび土坑と見られる落ち込みを検出した。土坑についてはいずれのものも掘り込みが浅く、ピットも1基しか、現状で確認できなかった。遺物は一切出土しなかった。そのため、竪穴状遺構とした。

##### 遺構外のピット・土坑（第43図）

A区調査区第2トレンチでは単発のピット（P-1）を検出した。トレンチの周辺部には住居などの落ち込みは見られなかった。トレンチ外に本ピットと関連するものがある可能性は捨てきれない。

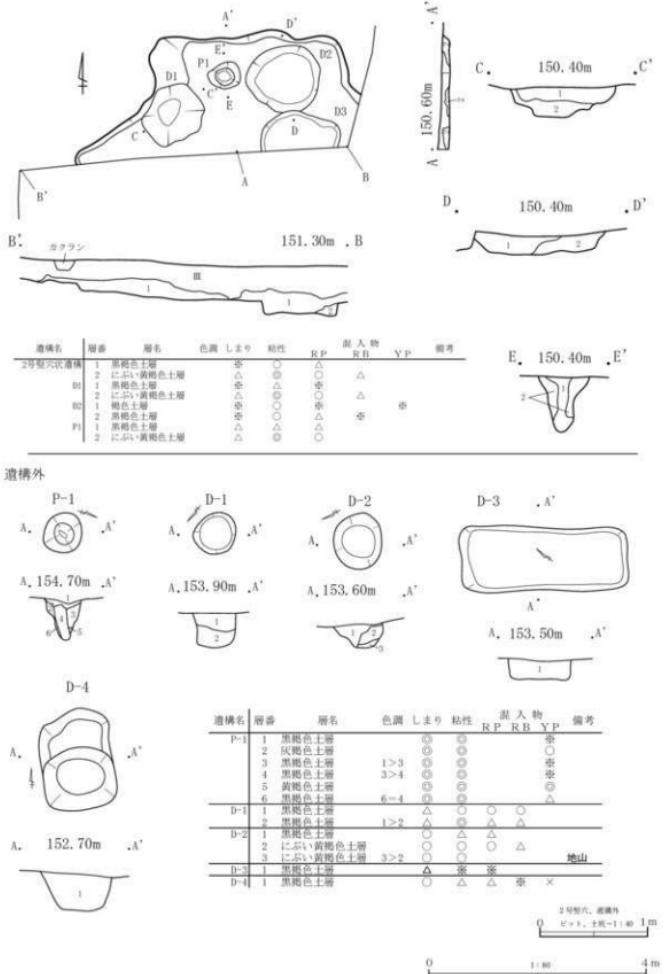
B区調査区では遺構外で三つの土坑を検出している。そのうち、1号土坑（D-1）からは杯と考えられる土器器の口縁部辺が出土している。3号土坑（D-3）は平面長方形に掘られており、断面もコの字の直堀である。2号溝に沿うように掘られているが、2号溝との関係は不明である。

C区調査区では、4号土坑（D-4）を検出した。土坑内の覆土は単層で、一度に埋没したことわかる。土坑底面は南側が一段低く掘られている。覆土からはS字彫の口縁部片が出土している。

##### 遺構外出土土器

西台Ⅰ・Ⅱ遺跡では遺構は確認されていないものの、多くの弥生中期に比定される土器片や平安時代に比定される羽釜、高台付碗などの土器が確認されている。これらの遺物はA区～C区までの調査区全体で出土しており、弥生中期や平安時代においても西台Ⅰ・Ⅱ遺跡で人間活動があつたことを物語っている。

2号竪穴状遺構



第43図 2号竪穴状遺構、遺構外検出ピット・土坑



1号土坑 (D-1)



4号土坑 (D-4)



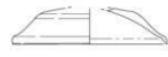
第1トレンチ



第2トレンチ

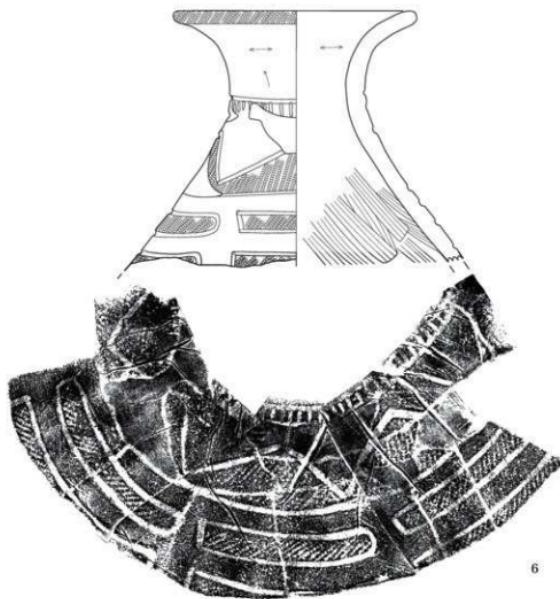


第3トレンチ

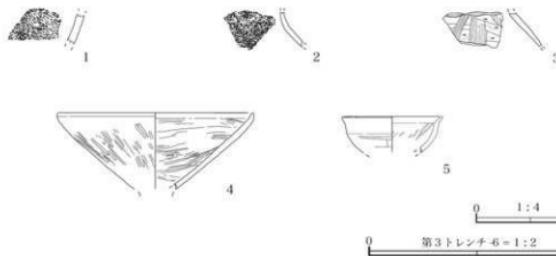
  
0 1 : 4 10cm

第44図 D-1・4号土坑、第1・2・3トレンチ出土遺物

第3トレンチ



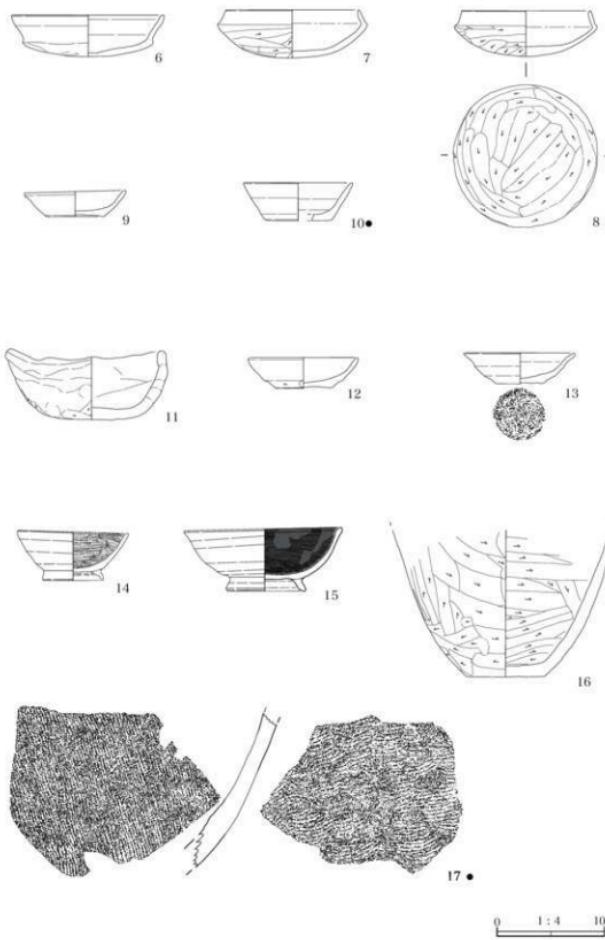
第4トレンチ



第45図 第3・4トレンチ出土遺物



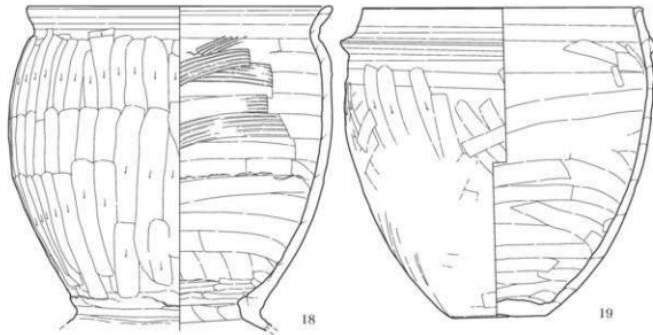
第4トレンチ



第46図 第4トレンチ出土遺物



第4トレンチ



Aグリット



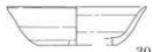
第47図 第4トレンチ、Aグリット出土遺物



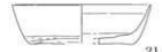
A グリット



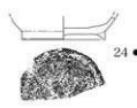
19



20 •



21 •



24 •



22 •



23 •



25 •



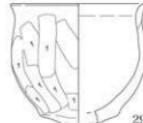
26



27



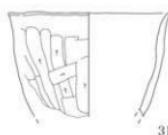
28



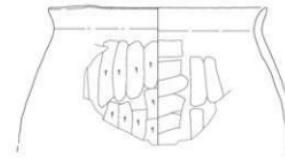
29



30



31



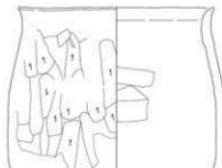
32

0 1 : 4 10cm

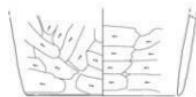
第48図 Aグリット出土遺物



A グリット



33

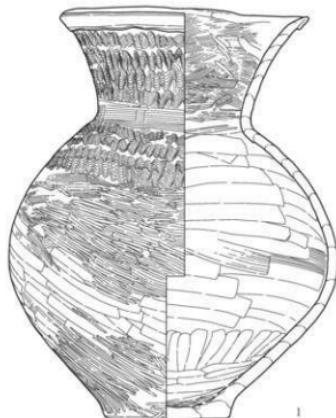


34



35

B グリット



1



2

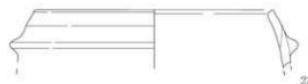
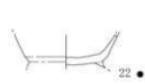
0 1 : 4 10cm

0 B グリット -2 - 1 : 2 16cm

第49図 A・Bグリット出土遺物



## B グリット

  
0 1 : 4 10cm

第50図 Bグリット出土遺物



## 5 出土石器について

西台Ⅰ・Ⅱ遺跡において石器と認識できたものは、石鏃（未製品）1点、剥片（黒曜石）1点、使用痕のある剥片1点、斧形石器・石鎌4点、磨石1点、編物石（こも編み石）1点。石製模造品2点、石製装身具（臼玉）1点である。石器は、編物石（こも編み石）を除いて遺構に伴うものではなく、全て単独出土である。スクレイパー、斧形石器・石鎌については、形態と出土土器との関係から、弥生時代中期の可能性が考えられる。石鏃は、縄文時代の可能性がある。石製模造品、石製装身具は古墳時代の所産である。磨石、編物石は、奈良・平安時代の可能性が考えられる。

第51図-1は、黒曜石製の小型石鏃（未製品）である。基部調整が施されていないが、完成品としての平基式の可能性がある。

第51図-2、3は滑石製の石製模造品である。2は研磨により整形された剣形である。基部が欠損する。3は円盤である。側面を研磨により円形に整形する。両面研磨によって板状に整形するが、孔は施されていない。

第51図-5は自然面を観した縦長剥片を素材とする。加工痕はみられないが、縁辺に微細剥離痕（摩滅）が観察される剥片である。素材をそのまま生かした弥生時代の横刃型石器に類似する。頁岩製である。

第51・52図-6～9は、斧形石器・石鎌である。出土遺物の共伴状況や形態的特徴から弥生時代のものと認識し、縄文時代の打製石斧と区別するために「斧形石器・石鎌」とした。6は板状の安山岩を素材とした石鎌の破片である。側線には交互の直接打撃による刺離調整が施され、剥離面には使用による摩耗痕が観察される。7は安山岩製の斧形石器である。基部が欠損する。縁辺が線状となる直接打撃による両面調整を施す。両面とも使用による摩耗痕が観察される。8は自然面を残す板状の横長剥片を素材とした斧形石器である。安山岩製である。両端が欠損するため刃部は不明である。縁辺が線状となる交互の直接打撃による調整が施される。両面には摩耗痕が観察される。9は頁岩製の石鎌である。基部部分が欠損する。側線が線状となる面的な交互の直接打撃による調整が施される。刃部に相当する範囲には、再加工が施される。著しい摩耗痕は観察されない。

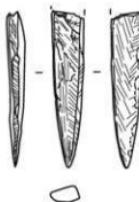
第53図-10は、安山岩製の円礫を利用した敲打痕が観察される磨石である。自然礫の可能性があるが、搬入された石材を使用したものとして石器とした。

第53図-11は、H-3号住居の土坑底面から出土した石器で、端部に敲打痕が観察される。形態的には、自然礫をそのまま利用する編物石（こも編み石）を再利用したものと考えられる。安山岩製である。

（井上）



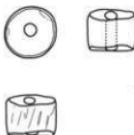
H22层 1号  
石器 06 S-2/3



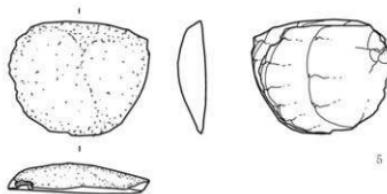
1号堅穴 上層一括 削形未成品 滑石 S-2/3



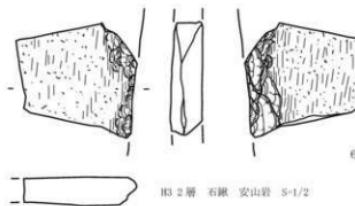
H14 B区覆土 円盤 滑石 S-2/3



H9 3層 白玉 滑石 S-1/1

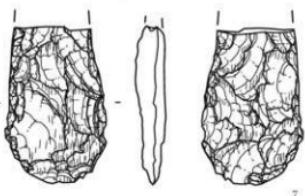


H31 1層 スクレイパー 頁岩 S-1/2



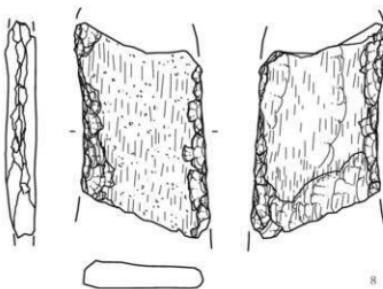
H3 2層 石錐 安山岩 S-1/2

第51図 出土石器1



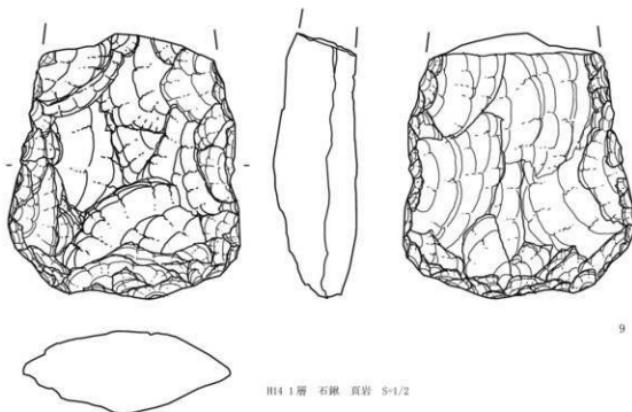
7

H3 3層 打斧 安山岩 S-1/2



8

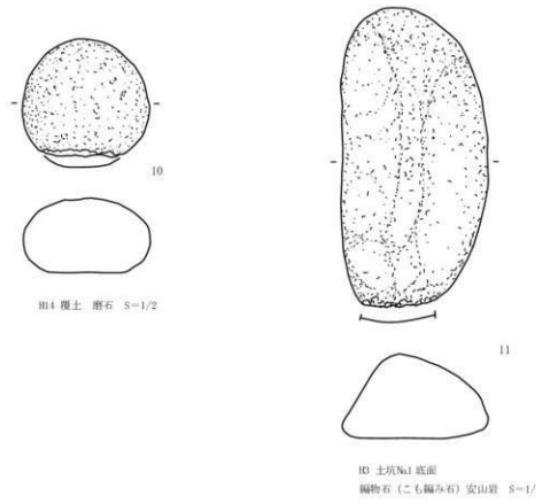
H3 2層 打斧 安山岩 S-1/2



9

H4 1層 石鋸 貢岩 S-1/2

第52図 出土石器2



第53図 出土石器3

